

向山根遺跡

—第2次発掘調査報告—

昭和 62 年 6 月

宇都宮市教育委員会

発 刊 に あ た っ て

宇都宮市北西部の城山地区は、「大谷石」として全国的にも有名な凝灰岩の産地ですが、原始・古代の遺跡も多くみられるところです。古くは昭和40年、人骨や縄文時代草創期までさかのぼる土器などの発見で話題となった大谷寺洞穴遺跡、また最近では凝灰岩の横穴式石室が発見された上の原古墳群など、発掘調査によって明らかにされた遺跡も少なくありません。

城山地区の田野町に所在する向山根遺跡も昭和58年、東京電力株式会社の送電線鉄塔建設に伴って一部発掘調査が行なわれ、古墳時代後期を中心とする竪穴式住居跡が多数発見されました。今回、発掘調査を実施したのはこの鉄塔の隣接地約300㎡であり、宅地の造成を原因とするものでした。

調査の結果、狭い面積にもかかわらず古墳時代後期の竪穴式住居跡が7軒検出されました。この成果は、本報告書に記録いたしましたので御活用いただければ幸いです。

末文になりましたが、調査にあたり御指導いただきました埴 静夫 小堀時藏両先生並びに栃木県教育委員会文化課、財団法人栃木県文化振興事業団、栃木県立博物館の専門職員諸氏、また、何かと便宜をお図りいただきました土地所有者の若井富士雄氏に対しまして深くお礼申し上げます。

昭和62年6月

宇都宮市教育委員会教育長

後 藤 一 雄

例 言

- 1 本書は宇都宮市田野町1142番地に所在する向山根遺跡の第2次発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は宇都宮市教育委員会が主体となって昭和60年4月30日～6月4日まで実施したものであり、調査面積は約300㎡である。
- 3 遺物の整理及び実測図・写真図版の作成等については、金田信夫・津布楽一樹(宇都宮大学学生)の協力を得て梁木誠がこれにあたった。また、本書の執筆は梁木がこれにあたった。
- 4 出土遺物は、宇都宮市教育委員会が保管している。
- 5 発掘調査の関係者は次のとおりである。

助 言 者	宇都宮市文化財保護審議委員会委員		塙 静夫
	同		大金 宣亮
	同		橋本 澄朗
事 務 局	宇都宮市教育委員会	社会教育課長	塚田 隆一
		文化振興係長	小林 綿一
		文化振興係	渡辺 卓
		同	斎藤 全男
調 査 員	宇都宮市教育委員会	文化振興係	定岡 明義
		同	手塚 英男
		同	梁木 誠
		同	小松 俊雄
		同	赤石澤 亮
		同	大塚 雅之
		同	神野 安伸
調 査 員 補			金田 信夫
調査補助員	安生 サキ	安生 ミカ	小林 マサ
	安生 ミカ	小林 マサ	小林 ミキ
	斎藤 イク	佐藤 正男	島崎 熊夫
	斎藤 正男	島崎 熊夫	福田 カネ
	福田 タイ	福田 タイ	堀田 一夫
	福田 タイ	堀田 一夫	松本恵美子
	松本 トシ	松本 トリ	松本 和子
	松本 トリ	松本 和子	味野和テツ
	森 ヒロ子	谷中 一郎	山崎 トキ
	森 ヒロ子	谷中 一郎	山崎 トキ
			渡辺 フミ

目 次

・ 発刊にあたって	
・ 例言	
I 調査に至るまでの経過	1
II 位置と環境	
1 遺跡の位置	2
2 周辺の地形	2
3 周辺の遺跡	3
III 調査の経過	5
IV 検出された遺構と遺物	
6号住居跡	8
7号住居跡	14
8号住居跡	17
9号住居跡	18
10号住居跡	23
11号住居跡	29
12号住居跡	33
円形有段土坑	36
V まとめ	
1 カマドについて	37
2 土器について	38

挿 図 目 次

第1図	向山根遺跡位置図	1
第2図	向山根遺跡調査地区図	2
第3図	向山根遺跡周辺の地形と遺跡分布図	4
第4図	向山根遺跡遺構配置図	7
第5図	6号住居跡実測図	9
第6図	6号住居跡カマド実測図	10
第7図	6号住居跡出土土器実測図(1)	11
第8図	6号住居跡出土土器実測図(2)	12
第9図	6号住居跡出土石製模造品および鉄鏃実測図	12
第10図	7号住居跡実測図	14
第11図	7号住居跡カマド実測図	15
第12図	7号住居跡出土遺物実測図	16
第13図	8号住居跡実測図	17
第14図	9号住居跡実測図	18
第15図	9号住居跡カマド実測図	19
第16図	9号住居跡出土土器実測図(1)	20
第17図	9号住居跡出土土器実測図(2)	21
第18図	9号住居跡出土土器実測図(3)	22
第19図	10号住居跡実測図	24
第20図	10号住居跡カマド実測図	25
第21図	10号住居跡出土土器実測図(1)	26
第22図	10号住居跡出土土器実測図(2)	27
第23図	10号住居跡出土石製品実測図	28
第24図	11号住居跡実測図	30
第25図	11号住居跡カマド実測図	31
第26図	11号住居跡出土土器実測図	32
第27図	12号住居跡実測図	34
第28図	12号住居跡出土遺物実測図	35
第29図	円形有段土坑実測図	36

表 目 次

第1表	向山根遺跡周辺の遺跡一覧	5
第2表	6号住居跡出土土器観察表	13
第3表	7号住居跡出土土器観察表	17
第4表	9号住居跡出土土器観察表	23
第5表	10号住居跡出土土器観察表	29
第6表	11号住居跡出土土器観察表	33
第7表	12号住居跡出土土器観察表	35
第8表	各住居跡出土土器坏の分類	38

図 版 目 次

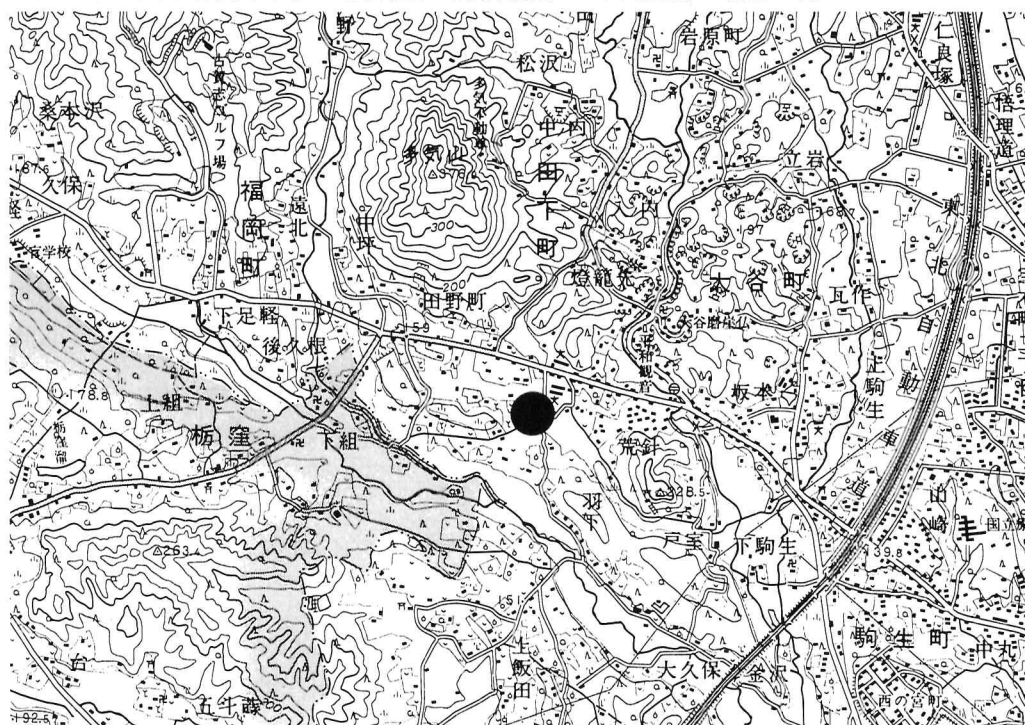
PL. 1	① 調査前の風景	② 試掘調査の風景
PL. 2	① 遺構検出状況	② 発掘調査風景
PL. 3	① 6号住居跡	② 6号住居跡カマド
PL. 4	① 7号住居跡	② 7号住居跡カマド
PL. 5	① 9号住居跡遺物出土状況	② 9号住居跡カマド周辺遺物出土状況
PL. 6	① 9号住居跡	② 9号住居跡カマド
PL. 7	① 10号住居跡遺物出土状況	② 10号住居跡カマド
PL. 8	① 11号住居跡	② 11号住居跡カマド
PL. 9	④ 12号住居跡	② 12号住居跡鎌出土状況
PL. 10	① 円形有段土坑断面	② 円形有段土坑
PL. 11	① 遺構全景	② 遺構全景
PL. 12	住居跡出土土器(1)	
PL. 13	住居跡出土土器(2)	
PL. 14	住居跡出土土器(3)	
PL. 15	住居跡出土土器(4)	
PL. 16	住居跡出土土器(5)	
PL. 17	住居跡出土遺物	

I 調査に至るまでの経過

本遺跡は昭和53～57年の5か年に実施した宇都宮市埋蔵文化財等遺跡詳細分布確認調査によって所在が明らかにされた遺跡である。また、昭和58年には東京電力株式会社の送電線鉄塔建設に伴い、南東部の一画約200㎡が発掘調査されている^{註1}。この発掘調査では狭い調査面積にもかかわらず、竪穴住居跡5軒と土坑3基が検出され、本遺跡がかなり密度の濃い集落遺跡であるらしいことが確認されている。

昭和59年の秋、この送電線鉄塔建設に伴う発掘調査地区のすぐ北側(当時は畑地)を宅地として開発したい旨が、土地の所有者である若井富士雄氏(大谷町599)より宇都宮市教育委員会に通報された。これを受けた宇都宮市教育委員会では、文化財保護の立場から数回にわたって協議を重ね、宅地予定地が登録された遺跡の範囲内であること、送電線鉄塔建設に伴う発掘調査で検出された遺構の続きが確実にあるとみられたことなどから、開発に先立って記録保存のための発掘調査を実施することとした。また、発掘調査は宇都宮市教育委員会が主体となって行うこととし、その時期を昭和60年5月と決定した。なお、若井氏には発掘調査終了まで開発を延期してもらいたい旨を申し出、快諾を得た。

註1 宇都宮市教育委員会【上の原古墳群・向山根遺跡・ニヶ山遺跡】 昭和58年。



第1図 向山根遺跡位置図 (1 : 50,000)

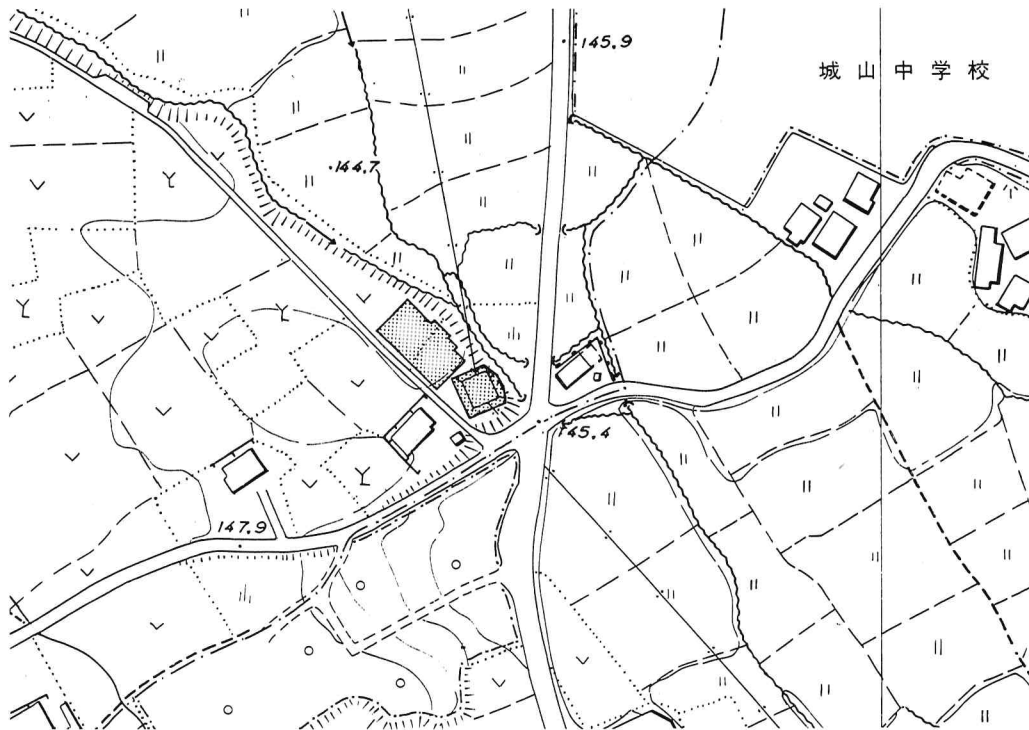
II 位置と環境

1 遺跡の位置

本遺跡の所在するのは宇都宮市田野町1142番地である。宇都宮市の中心部から西へ約6kmの鹿沼市寄りに位置し、道路を隔ててすぐ東側には市立城山中学校がある。付近は水田と畑が中心であるが、北側の山地部は宇都宮市の重要な産業の一つである「大谷石」の産地であり、各所に石切場がみられる。なお、本遺跡は大部分が畑地であるが、一部に平地林や概に宅地化しているところもみられる。

2 周辺の地形

本遺跡が立地するのは多気山(標高378m)の南麓から南東に向って舌状に延びる台地の上である。西側約500mには古賀志山地に源を発する赤川が流れ、この台地の先端部で姿川に合流している。遺跡周辺の標高は150m前後であり、赤川によって開析された低地面との北高差は7～8mである。今回の調査地区部分はこの台地上の緩やかな西斜面上であり、すぐ西側には南東に向って開く浅い谷が入っている。現在、この谷部は大部分が水田となっており、調査地区との比高差



第2図 向山根遺跡調査地区図 (1:2,500)

は約3mである。なお、調査地区一帯は畑地として開墾された段階にかなり削平を受けた様であり、ローム地山までの表土の厚さは20~30cmと全体に薄くなっている。

3 周辺の遺跡

本遺跡は前述したように北東の山地部側に寄った位置に立地していることから、関連遺跡は大部分が南東側の平地に近い部分に集中している(第3図)。時代は第1表で示すとおり旧石器から近世と各時期にわたっており、内容も集落、洞穴、古墳、高塚と多様である。ここでは、これら周辺の遺跡の中から発掘調査により内容の明らかにされているもの及び本遺跡との関連から古墳時代に属するものを中心に紹介していくこととしたい。

大谷寺洞穴遺跡(136) 洞穴は開口30m、奥行13m、高さ12mの規模で、西南に開口したものである。昭和40年に発掘調査がなされ、土器、石器、獣骨、貝、人骨などが検出されている。土器は縄文期から奈良、平安期のもまでみられるが、最も古いものは草創期までさかのぼるものもみられ、全国的にも著名な遺跡となっている。

台耕上遺跡(155) 姿川右岸の台地上に立地する縄文時代中期の集落跡であり、昭和44年から45年にかけて、東北縦貫自動車道路建設に伴う発掘調査が一部になされている。調査では竪穴住居跡1軒と土抗7基が検出されており、土抗はほとんどが袋状を呈するものであった。なお、出土土器は加曾利EI式期のものである。

上の原古墳群(148) 姿川右岸に延びる舌状台地上に立地した古墳群であり、現在8基の円墳を確認することができる。墳丘の規模は大小様々であり、大きいものは径20m前後で高さ2~3m、小さいものは径10m前後で高さ1mに満たない。昭和62年1月、この中の8号墳が発掘調査され、周溝と横穴式石室が検出されている。なお、横穴式石室は凝灰岩を使用した全長3.5mほどの小型なものであり、玄室内からは小玉が1個検出されている。

宗円塚古墳群(146) 上の原古墳群と同じ台地上で、やや北西に位置した古墳群である。現在確認できるものは円墳4基であり、規模は最も南に位置する宗円墳が径18m高さ3mと最も大きく、他は径5~10m高さ1m未満の小さなものである。なお、この古墳群は本遺跡(向山根遺跡)の南東約700mに位置し、現在確認できるものの中では本遺跡に最も近い古墳群である。

瓦作古墳群(137) 姿川左岸の舌状台地上東端に立地する古墳群であり、現在4基の円墳を確認することができる。規模は径10~20m高さ1.5~3mであり、この内の一基には横穴式石室の一部と思われる凝灰岩が露呈している。この古墳群はかなり山間部寄りのものであり、姿川流域においてはおそらく北限のものともみられる。

梅林遺跡(146) 本遺跡と浅い谷を挟んだ反対側の台地上西斜面に立地する集落跡であり、縄文土器、土師器などが採集できる。城山中学校の校庭拡張の際にこの遺跡の一部がかかり、土器類が出土している。現在この土器類は同中学校に保管されているが、大部分は古墳時代後期・鬼高期の土師器である。



第3図 向山根遺跡(141)周辺の地形と遺跡分布図 (1 : 15,000) ※網部が遺跡の範囲で黒ぬり部が調査地区

番号	遺跡名	種別	時期	備考
136	大谷寺洞穴遺跡	洞穴住居跡	縄文・弥生時代	昭和40年発掘調査。
137	瓦作古墳群	古墳群	古墳時代	円墳4基。
138	坂本高塚群	高塚群	近世	高塚12基。
139	羽黒古墳	円墳墳	古墳時代	
141	向山根遺跡	集落跡	古墳～平安時代	昭和58年発掘調査（第1次）。
142	境木遺跡	〃	縄文・古墳時代	
143	漆久保遺跡	〃	縄文時代	
144	梅林遺跡	〃	縄文・古墳時代	城山中学校に出土土器保管。
145	上の原遺跡	〃	旧石器・縄文・古墳時代	
146	宗円塚古墳群	古墳群	古墳時代	円墳3基。
147	羽下薬師堂裏古墳	円墳	〃	
148	上の原古墳群	古墳群	縄文・古墳時代	円墳8基。昭和62年1月発掘調査。
149	中城跡	城館跡	中世	
152	荒針高塚群	高塚群	近世	
153	サルボ山高塚群	〃	〃	
154	大久保遺跡	集落跡	縄文時代	
155	台耕上遺跡	〃	〃	昭和44・45・47年発掘調査。

第1表 向山根遺跡周辺の遺跡一覧 ※番号は宇都宮市遺跡台帳による。

境木遺跡(142) 本遺跡とほぼ同じ台地上で、やや南に位置した集落跡である。現状は大半が畑地であり、縄文土器、土師器、須恵器などが採集できる。

以上のように、本遺跡周辺には、いくつかの舌状台地ごとに集落跡と古墳群(小円墳群)が点々とみられる。発掘調査によらなければ正確なことは判断できないわけであるが、おそらくこれらは同じ人々による住居と墓地という形で、強いつながりをもっていたものとみられる。

Ⅲ 調査の経過 —発掘日誌抄—

4月30日 基準杭とトレンチの設定。地形に合わせる形で一辺5mの方眼グリッドを組み、さらに各グリッド毎に長さ4m幅1mのトレンチを直交する形で2本設定した。計画としては、このトレンチによって遺構がかかった部分を広げるということであった。

5月6日 トレンチ掘り。最初に土層を確かめるため、南と北の2か所で試掘を行った。この結果、表土が20～30cmと全体に浅く、耕作はハードローム上面まで及んでいることが確認された。このため、各トレンチとも耕作土を除去し、ハードローム上面まで掘り下げることにした。

5月7日～8日 トレンチ掘り。この2日間で設定したすべてのトレンチの掘り下げを完了し

た。この結果、遺構が調査地区のほぼ全域に及んでいることが確認されたため、全面の表土を除去することとした。なお、遺構確認面まではすべて耕作が及んでいることが確認されたため、各グリッドに残す予定であったベルトもすべて除去することとした。

5月9日～11日 遺構のプラン確認。この3日間で調査地区全体の表土除去をほぼ完了し、竪穴住居跡7軒と円形土抗1基の平面プランを確認した。また、各住居跡には南(第1次調査地区)側から番号(6～12号住居跡)を付した。

5月13日～16日 6号住居跡・円形有段土抗の調査。6号住居跡は第1次調査の時に南壁の一部が検出されていたものであり、今回の調査によって北半分が検出されることになっていたものであるが、調査の結果、第1次調査で検出され平面プランに合致することが判明した。未調査部分を一部に残す結果となったが、これによって大体の規模と相様は確認することができた。円形有段土抗は、平面プラン確認段階では円形土抗と考えていたものであるが、掘り下げが進むにつれて、中位に明確な段を有する特異な形態であることが判明した。なお、これを切っていた長方形土抗は、電柱を埋めるために重機で掘ったものであった。

5月17日～20日 7, 8号住居跡の調査。7号住居跡は調査地区の東にかかっていたため、拡張して全プランを検出した。東壁に設けられたカマドは、調査の結果、ローム地山を削り出して袖としていることが確認された。8号住居跡は非常に小形なものであり、南壁に重複かと思える段がみられた。しかし、調査してみると重複ではなく、一つのプランであることが確認された。なお、この住居跡は床面が非常に浅く、またカマドも燃焼部底面の痕跡だけが残っていた。

5月21日～24日 9・10号住居跡の調査。9号住居跡は、今回の調査区の中では最も整美な竪穴住居跡であった。また、遺物の出土状態も良好であり、カマドの右手周辺には多数の甕、甑、坏などが、当時の状態そのままのような様子で検出された。なお、カマドは7号住居跡同様、ローム地山を削り出して袖としているものであった。10号住居跡もやはり遺物の出土が多くみられた。ただし、9号住居跡が大部分床面直上で検出されていたのに対し、本住居跡の場合は中層からの検出も多かった。これは、第1次の埋没が終了したあたりの段階で土器類のすて場として使用されたような状態であった。なお、床面出土遺物の中には多量の手捏ね土器がみられ、本住居跡の大きな特色を示していた。

5月25日～29日 11・12号住居跡の調査。11号住居跡は、遺構の検出面前後の覆土上層から、比較的良好な遺物の出土がみられた。この中には今回の調査地区内では唯一の須恵器も小破片ながら検出された。12号住居跡は、調査地区の北にかかったものであり、カマドを含む北東部が未調査で残った。遺物の量は他の住居跡に比較して少なかったが、今回の調査地区内では唯一の鎌が床面近くより検出された。

5月30日 遺跡全体写真の撮影。

5月30日～31日 遺構の測量。

6月3日～4日 埋め戻し作業。調査終了。

IV 検出された遺構と遺物

今回の発掘調査で検出した遺構は、竪穴住居跡7軒(6～12号住居跡)と円形有段土坑1基である。この内、6号住居跡と12号住居跡は、遺構が調査地区外に延びていたため一部掘り残したが、他はすべて完掘している。

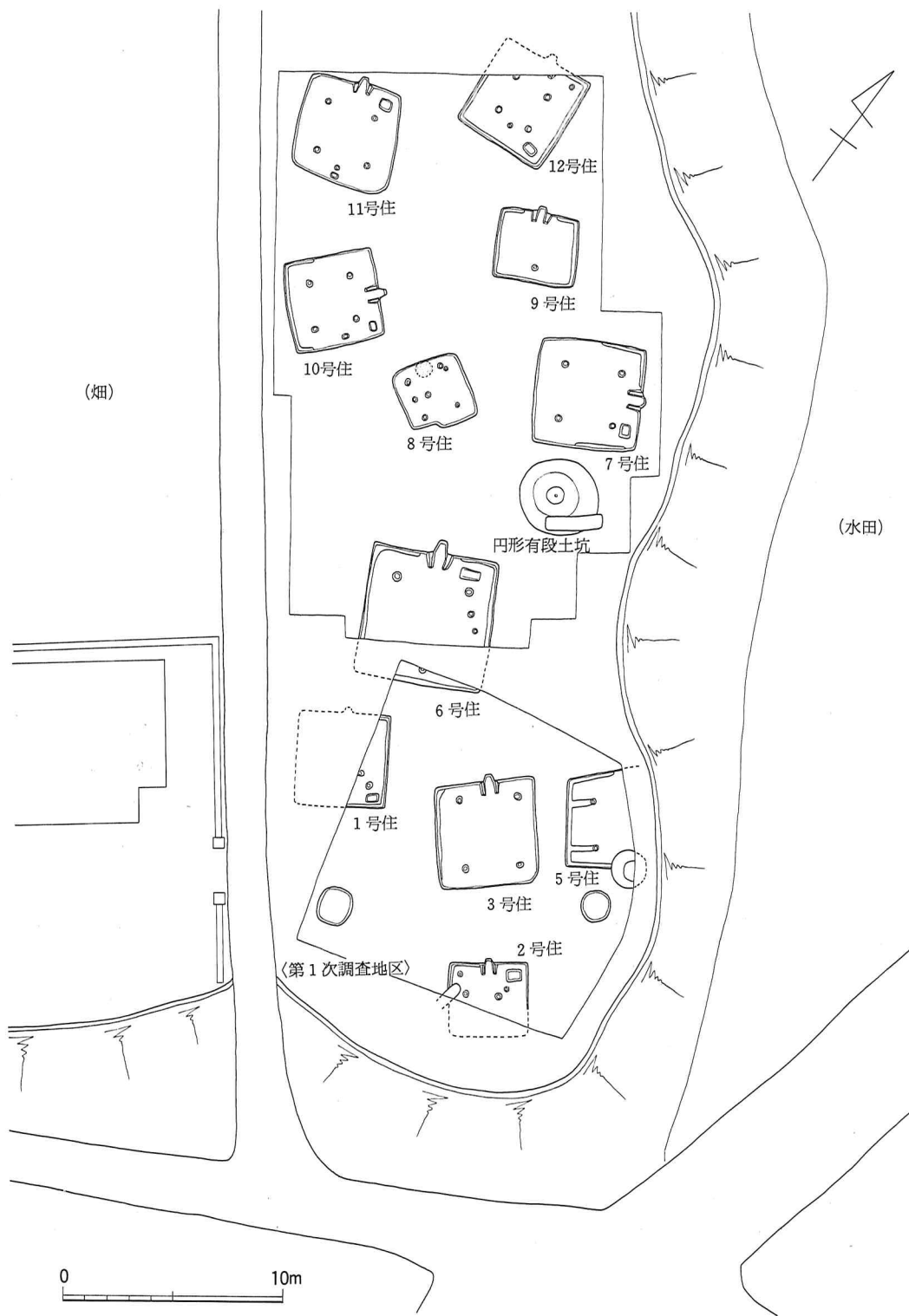
ここでは、これらの遺構の特徴およびそれぞれの出土遺物(土器、石製品、土製品、鉄器など)の内容についてまとめることにしたい。

6号住居跡

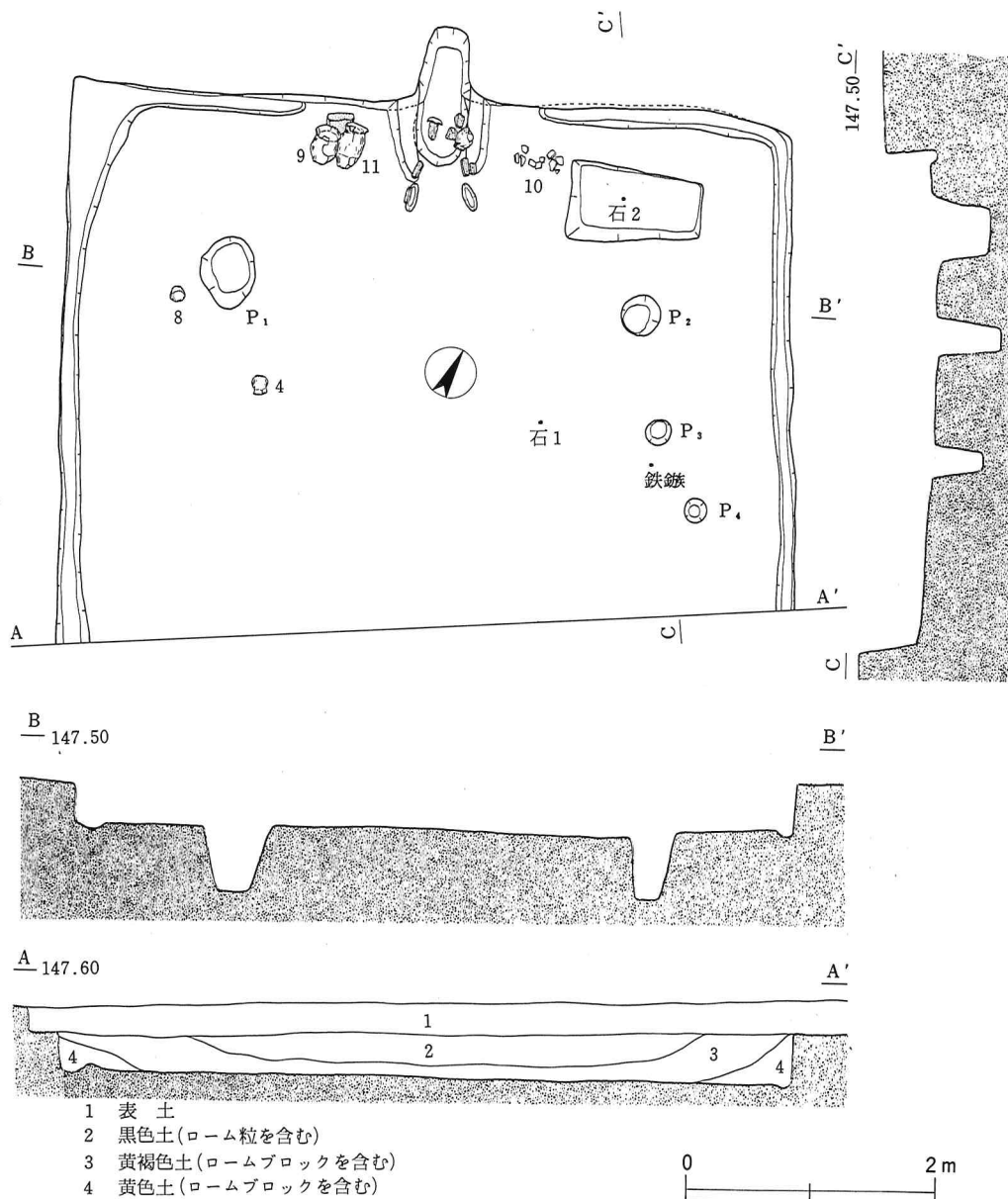
(1) 遺構について(第5・6図)

本住居跡は、調査地区の一番南の端から検出されたものであり、第1次調査の時にその南壁の一部が確認されたものである。今回の調査で検出したのは北側約 $\frac{2}{3}$ であり、南側約 $\frac{1}{3}$ の大半は調査地区外ということで、未調査のままである。ただし、第1次調査の成果と合わせれば、おおよその規模と形状は判断することができる。平面形はやや南北に長い形で、規模は南北長5.95m、東西長5.85mである。壁は確認面からの深さが平均して35cm前後であり、立ち上がりはほぼ90度と急である。特に北壁の東半部では、オーバーハング気味になっている。床面はほぼ平坦で、中央部からカマド前面にかけては固くなっている。周溝はカマド部分を除いてほぼ全周しているが、第1次調査で確認した南壁部分には確認されていない。幅は北西コーナー付近でやや広がるが、全体的には15cm前後である。また、深さは5～6cm程度である。支柱穴は、一応4本と考えられるが、確認したのは北側の2本(P_1 ・ P_2)だけである。位置はいずれも対角線上であり、中心間の距離(P_1 — P_2)は3.30mを測る。深さは、 P_1 が52cm、 P_2 が50cmと近似し、その掘り形もほぼ同じ形状である。東壁寄りで見出された P_3 、 P_4 は位置的にみて支柱穴とは考えられないものであるが、 P_3 が37cm、 P_4 が29cmと深さはしっかりとしており、補助柱穴として使用されたものとみられる。なお、第1次調査において、南壁寄りのほぼ中央から深さ20cm程度の小穴が見出されており、入り口の施設に関連するものと思われる。貯蔵穴はカマドの東側、北東コーナー寄りから検出されている。平面形は105cm×55cmの東西に長い長方形であり、底面は平らで床面からの深さが45cmである。掘り方はかなりしっかりとしたものであり、特に北東側の壁はほぼ垂直に掘られている。

カマドは、北壁のほぼ中央で見出されている。煙道部の壁への切り込みは比較的長く、55cmを測る。この切り込みは、壁に対して直角ではなく、やや東に傾いているが、その掘り方はしっかりとしたものであり、先端はほぼ方形を呈している。また、先端部の立ち上がりは、約70度の急傾斜である。なお、この煙道部の確認面での幅は、壁への切り込み口で45cm、先端部で25cmである。袖及び天井部は褐色粘土で構築されたものであり、袖の残り具合から判断すると本体の規模

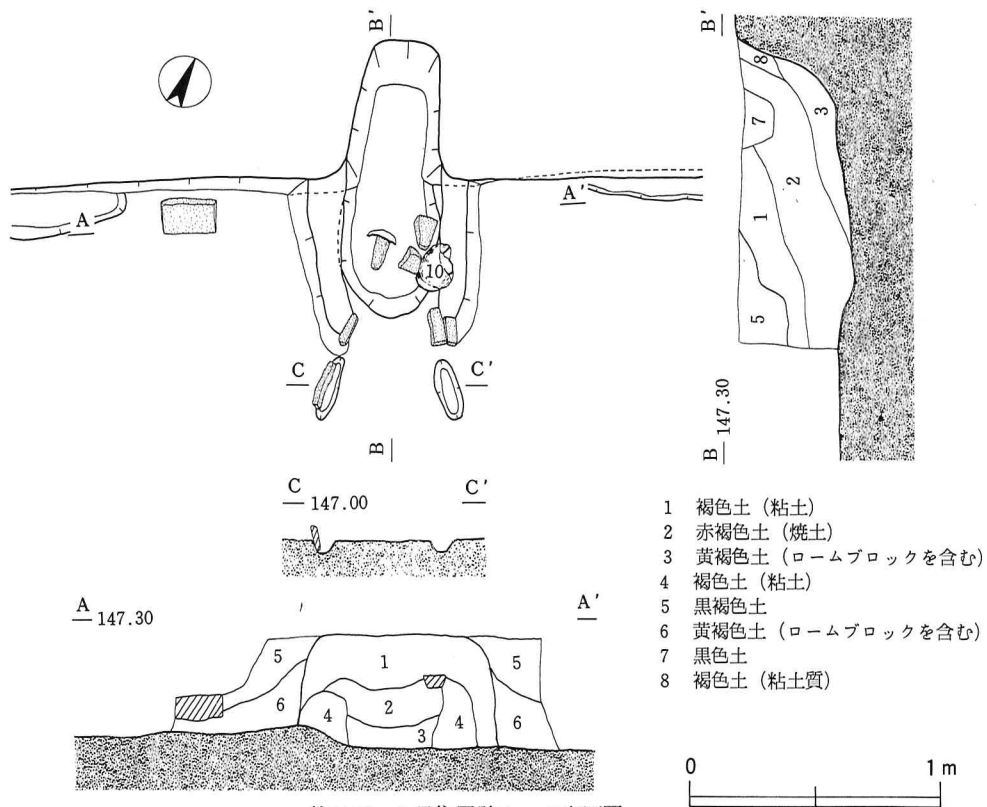


第4図 向山根遺跡遺構配置図



第5図 6号住居跡表測図

は、奥行が70cm前後、幅が壁部で75cm前後、焚き口部で55cm前後と推定される。焚き口部は両袖の先端に凝灰岩の板石の破片が残っていたことから、石組みになっていたものとみられる。おそらくカマド西側の壁寄りから検出された凝灰岩板石が天井部に高架されていたものであろう。また両袖の先端前面には八の字状に開く深さ5cm程度の細長い穴が確認され、西側のそれからはやはり凝灰岩の板石片が立った状態で検出されている。おそらく、焚き口部の前面に防火壁のよう



第6図 6号住居跡カマド実測図

な形で2枚の板石を立てたものとみられる。燃烧部の掘り方はやや南北に長い不整円形で、深さは7~8cmと浅めである。なお、この中央部からは支脚として使用されたとみられる、長さ15cmの細長い川原石が真赤に焼けて検出されている。

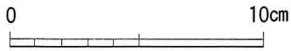
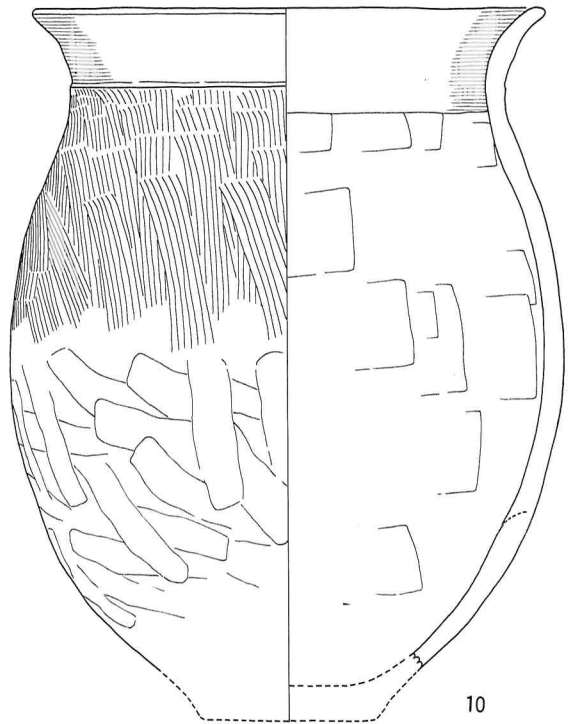
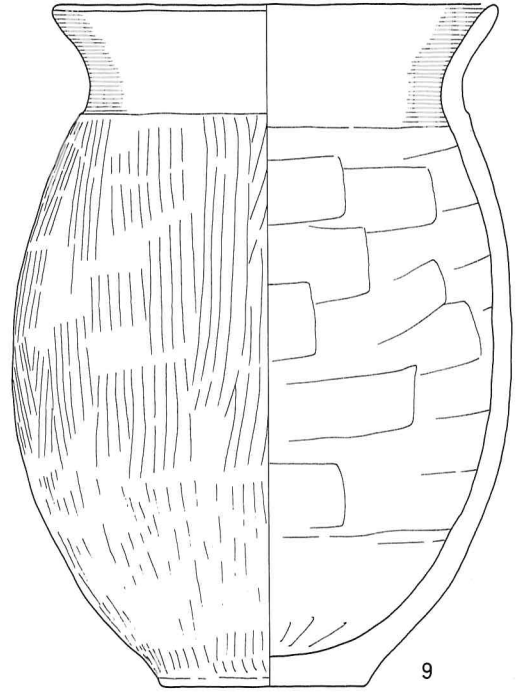
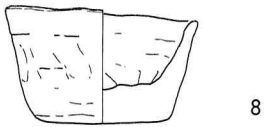
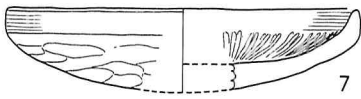
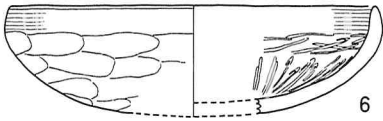
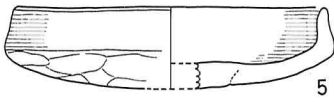
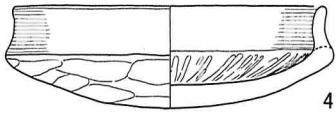
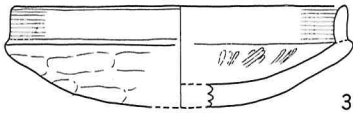
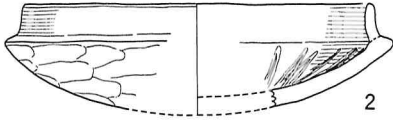
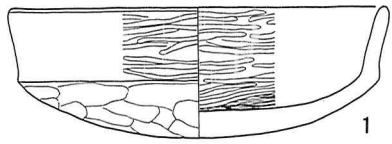
覆土の堆積はほぼレンズ状に3層に分かれ、自然埋没であったことを示している。

(2) 遺物について

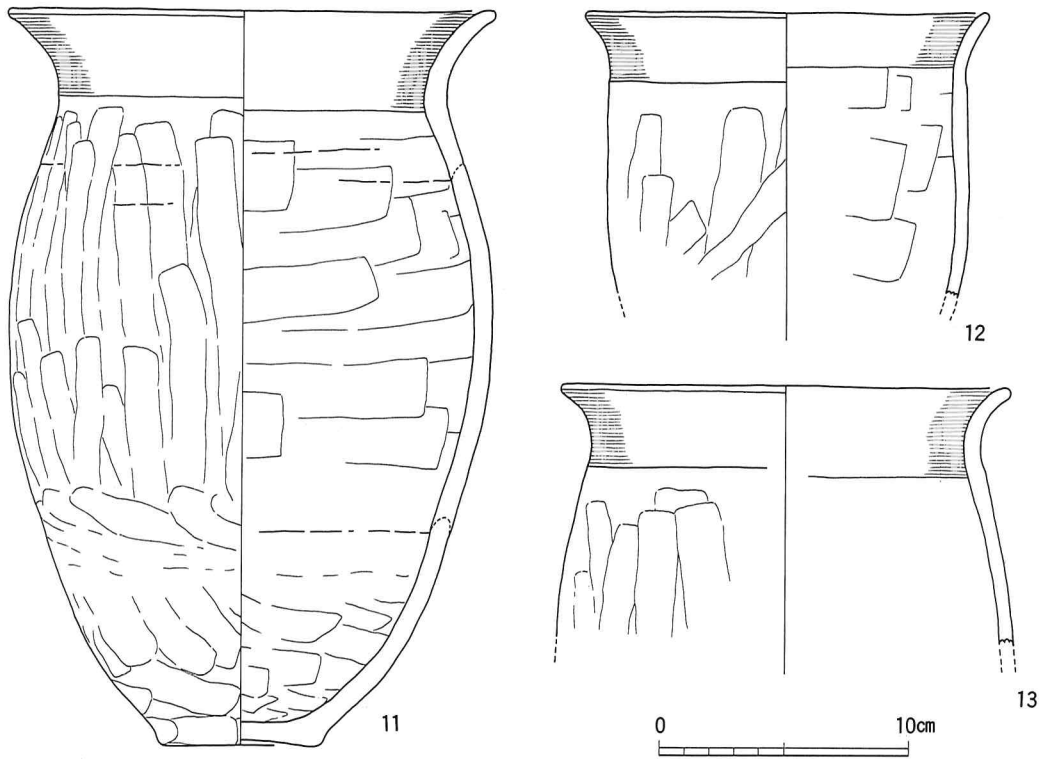
本住居跡から検出された遺物は、土器と石製模造品と鉄器である。

土器(第7・8図) 検出されたものはすべて土師器であり、そのうち図示し得たのは坏7点(1~7)、手づくね土器1点(8)、甕5点(9~13)の計13点である。

坏はいずれも覆土の中~下層より出土したものであり、床面直上から検出されたものはみられない。8の手づくね土器は、支柱穴P₁近くの床面上より出土したものである。9と11の甕は、カマドのすぐ西側より2つ並んで出土したものである。丁度、カマドに使用したと思われる凝灰岩の板石に倒れかかるような状態であったことから、この2つの甕は並べて立てられていたものとみられる。10の甕はカマドの東袖部上から検出されたものであるが、胴部の約1/3と底部が欠損したものであり、おそらく補強材として利用されたものと考えられる。また、12・13の甕は、覆土中から出土したものである。なお、第1次調査の時にも、土師器片が少々出土したが、図示



第7图 6号住居跡出土土器実測図(1)

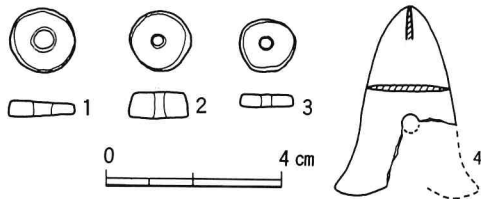


第8図 6号住居跡出土土器実測図(2)

し得るほどのものは認められていない。なお、各土器の特徴は、第2表に示すとおりである。

石製模造品(第9図1~3) 3点とも滑石製の白玉である。いずれも覆土の下層からの出土であり、1は住居跡の中央部、2は貯蔵穴上よりそれぞれ検出されたものである。1は径14.5mm, 孔径4.5mmで、厚さは2.5~3.5mmである。2は径14.5mm, 孔径2.5mmで、厚さは5.5~6.0mmと厚い。3は径13.0mm, 孔径2.5mmで、厚さは2.5mm~3.0mmである。いずれも白玉としては、比較的大型であるとみられる。

鉄鏃(第9図4) 東壁寄りの覆土下層から出土したものである。形式は平根式で、おそらく無茎と思われる。腸袂は裾部が広がる形のものであり、片方は欠損している。また、身はかなり薄くできているが、断面両丸の形式であり、中央部に小孔を有している。なお、大きさは次のとおりである。



第9図 6号住居跡出土石製模造品および鉄鏃実測図

残存長(全長か?)——4.2cm。

腸袂両端間の長さ——推定で3.2cm。

中央部孔の直径 ——3.5cm。

身の厚さ ——中央部で1.5mm。

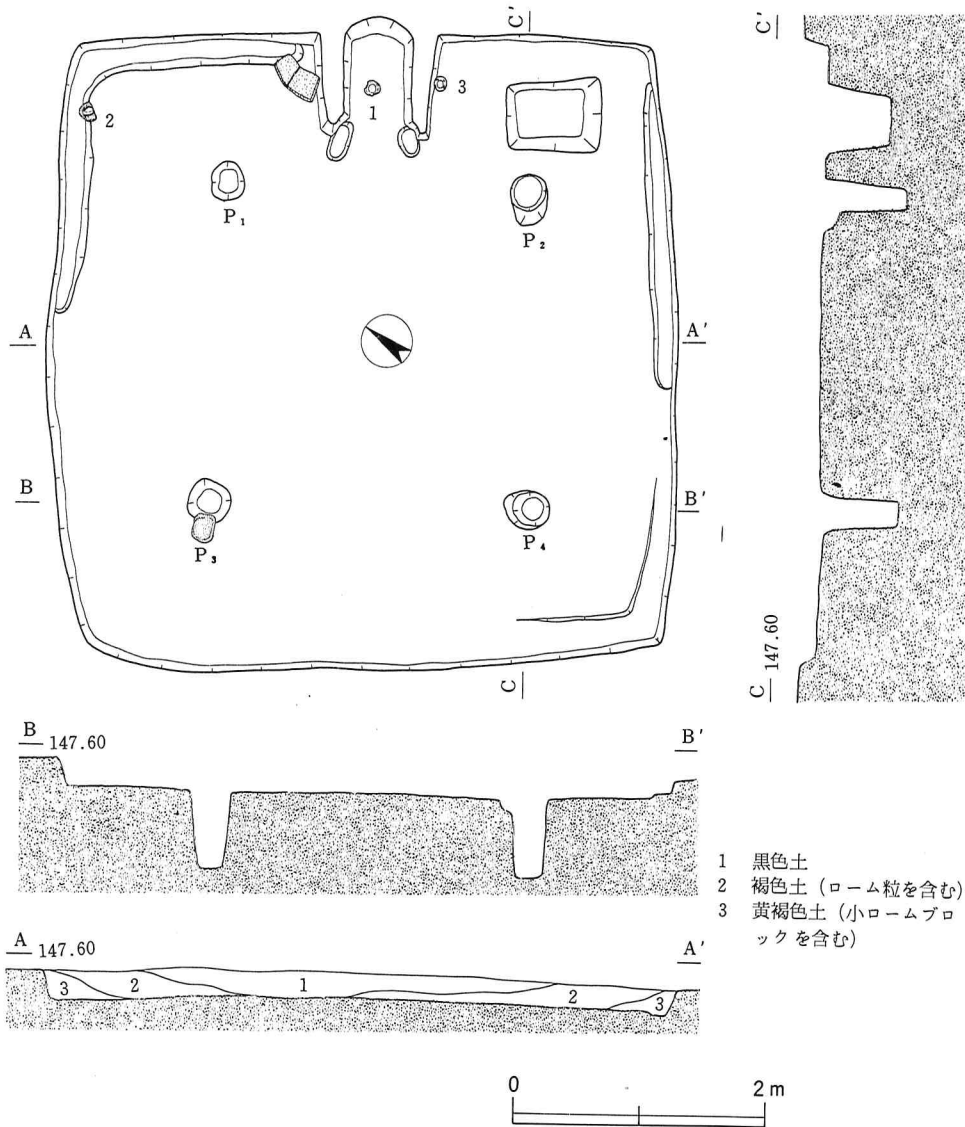
番号	器種 (残存量)	口径 器高 底径cm	器形の特徴	調整の特徴		胎土・焼成・色調・その他
				内面	外面	
1	坏 ($\frac{2}{3}$)	14.7 5.2 .	体部外面に軽い稜を有して、口縁部が外上方へ開く。	全面、丁寧なヘラ磨き。	底部ヘラ削り、口縁部は横ナデ後ヘラ磨き。	胎土はやや密。焼成良好。色調は淡赤褐色。覆土下層出土。
2	坏 ($\frac{1}{3}$)	(13.6) (4.4) .	体部外面に強く張り出す稜を有し、口縁部がやや内傾。	横ナデ後、底面に放射状のヘラ磨き。	底部ヘラ削り、口縁部は横ナデ。	胎土はやや粗。焼成良好。色調は褐色で内面が暗褐色。覆土中出土。
3	坏 ($\frac{1}{3}$)	(13.0) (4.0) .	体部外面に稜を有し、口縁部はほぼ直立。	口縁部横ナデ。底面は放射状のヘラ磨き。	同上。	胎土はやや密。焼成やや不良。暗褐色。覆土中出土。
4	坏 ($\frac{2}{3}$)	12.1 4.0 .	体部外面に稜を有し、口縁部は外反気味に立つ。	口縁部横ナデ。底面は放射状のヘラ磨き。	同上。	胎土はやや粗。色調は暗褐色。覆土下層出土。
5	坏 ($\frac{1}{3}$)	(12.0) (3.2) .	体部外面に軽い稜を有し、口縁部はやや内傾して立つ。	口縁および底面横ナデ。	同上。	胎土は密。焼成やや不良。淡褐色。覆土中出土。
6	坏 ($\frac{1}{3}$)	(14.4) (4.4) .	半球形状。口縁部は直立して、端部が尖る。	口縁部は横ナデ。底面は放射状のヘラ磨き。	同上。	胎土はやや密。焼成良好。赤褐色。覆土中出土。
7	坏 ($\frac{1}{4}$)	(13.6) (3.3) .	扁平な半球形状。口縁部は直立して、端部は尖り気味。	口縁部は横ナデ。底面は密な放射状のヘラ磨き。	同上。	胎土はやや粗。焼成良好。褐色。覆土中出土。
8	坏 (完形)	7.5 4.5 5.2	底部は平ら。体部はやや外へ開く。	手づくね。底面はヘラナデ。	手づくね。	胎土は密。色調は暗茶褐色。床面出土。
9	甕 ($\frac{2}{3}$)	17.5 26.8 8.1	口縁部はくの字に外反。体部はやや膨らみ、中位に最大径(19.8)。	口縁部は横ナデ。胴部は横位のヘラナデ。	口縁部は横ナデ。胴部は縦位のハケ目調整。底部はヘラ削り。	胎土は粗。2次焼成を受けややもろい。暗褐色。カマド左脇の床面出土。
10	甕 ($\frac{2}{3}$)	(20.0) (26.0) —	口縁部はくの字に外湾。体部はやや膨らみ、中位に最大径(21.9)。	同上。	口縁部は横ナデ。胴部は上半が縦位のハケ目調整、下半が斜位のヘラ削り。	胎土は粗。焼成良好。暗赤褐色。カマド内出土。
11	甕 ($\frac{2}{3}$)	19.0 29.0 6.3	口縁部はくの字に外湾。長胴気味で、最大径(19.1)はやや上位。	同上。	口縁部は横ナデ。胴部は上半が縦位、下半が斜位のヘラ削り。	胎土は粗。焼成やや不良。暗褐色。カマド左脇の床面で9と並んで出土。
12	甕 ($\frac{1}{3}$)	(16.0) (11.2) —	小形。口縁部はわずかに外反。	同上。	口縁部は横ナデ。胴部上半は縦位のヘラ削り。	胎土はやや粗。焼成良好。暗褐色。覆土中出土。
13	甕 ($\frac{1}{4}$)	(17.8) (10.0) —	口縁部はくの字に外湾。	口縁部は横ナデ。胴部は不明。	同上。	胎土は粗。焼成やや不良。明褐色。覆土中出土。

第2表 6号住居跡出土土器観察表

7号住居跡

(1) 遺構について(第10・11図)

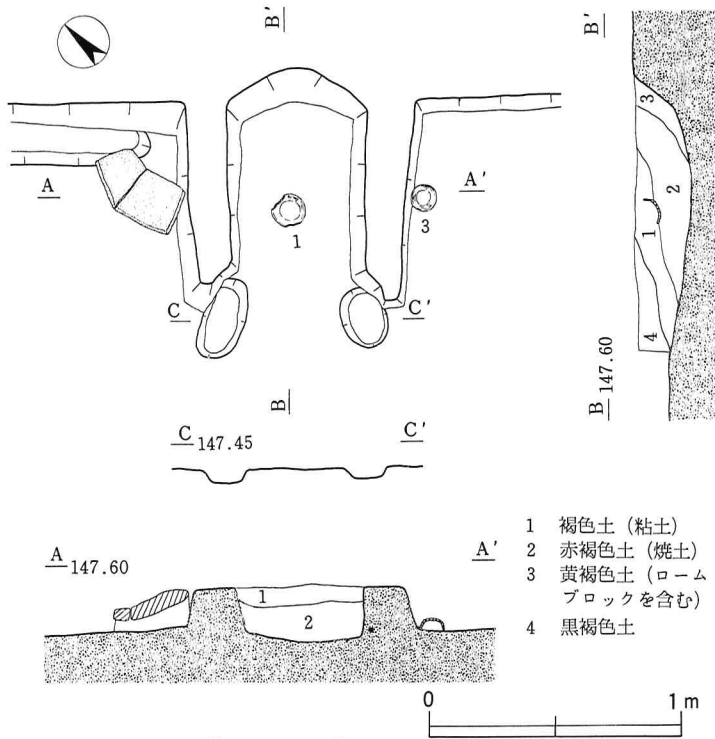
本住居跡は6号住居跡の北6mの地点より検出されたものであり、東側の谷部に面している。平面形はほぼ正方形で、南北長4.98m、東西長4.96mを測るが、各辺とも若干ながら胴張り気味になるのが特徴である。壁の掘り込みは全体に浅く、確認面からの深さは北東部で20~30cm、南西部で15cm前後である。床面はほぼ平坦であるが、南西コーナー近くに4~5cmの段が一部みら



第10図 7号住居跡実測図

れる。おそらく、拡張前の壁を残したものと考えられる。周溝は全周せず、北東コーナー部と南壁西寄りにみられる。幅は20～25cmと比較的広く、深さは3～5cmである。支柱穴は4本で、ほぼ対角線上に位置する。掘り方はいずれも円形で掘り込み面での径は25～30cmである。各柱穴の深さはP₁が62cm、P₂が61cm、P₃が58cm、P₄が60cmであり、ほぼ60cm前後に統一されている。また、各柱穴間の距離はP₁－P₂が2.37m、P₃－P₄が2.53m、P₁－P₃が2.51m、P₂－P₄が2.49mであり、カマド側の柱穴間の距離がやや短くなっている。貯蔵穴はカマドの右脇、南東コーナー寄りから検出されている。平面形は75×55cmのやや南北に長い長方形であり、深さは50cmを測る。

カマドは東壁のほぼ中央から検出されている。耕作によって確認面がかなり深くまで削平されていたことと本住居跡の掘り方自体が浅めであることから、煙道部の検出は立ち上がり部分だけとなっている。この立ち上がり部分の壁への切り込みは12.3cmと浅く、切り込み口での幅は55cmである。袖部はローム地山の削り出しであり、その大きさは、右袖が長さ81cm、幅22～27cm、左袖が長さ80cm、幅23～25cmである。また、高さは住居跡の壁と同じで確認面までは達している。両袖部とも内側が赤く焼土化しており、直接火を受けていたようであるが、外側は褐色粘土が薄く貼り付いており、おそらく天井部から続いて覆っていたものとみられる。両袖部の先端に密着してハの字状に開く長方形ピットが検出されている。大きさは、右袖のそれが24cm×17cm、左袖のそれが32×17cmであり、深さはいずれも4～5cmと浅い。これは6号住居跡の例から、焚口を



構築する石材を立てたピットとみられるが、両袖部先端内側の切り込みはこれにより安定させるためのものと考えられる。左袖部のすぐ近くから検出された凝灰岩の板石はおそらくこの焚口部に使用されていたものとみられる。以上のことから想定すると、本カマドの大きさは、奥行きが約1m、幅が壁部で約1m、焚口部で約90cmである。なお、燃焼部の掘り込みの形状は不整隋円形で、床面からの深さは14～15cmである。

第11図 7号住居跡カマド実測図

(2) 遺物について

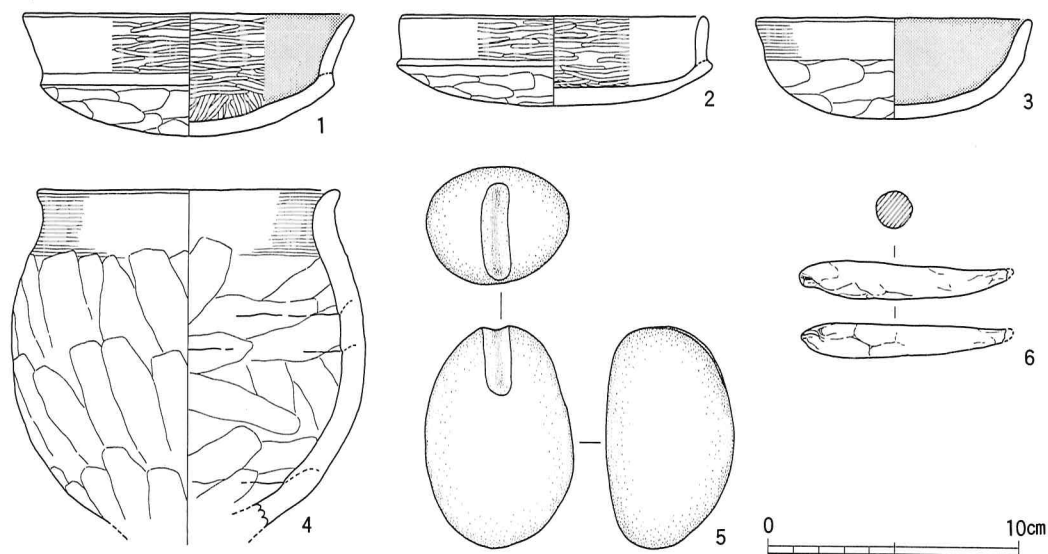
本住居跡から検出された遺物は、土器と石器と土製品である。

土器(第12図1～4) 検出されたものはすべて土師器であり、そのうち図示し得たのは坏3点(1～3)、甕1点の計4点である。

1の坏はカマド内のほぼ中央で、燃烧部底面から12cm上の焼土層上面から出したものであり、内面が黒色処理されている。2の坏は北壁下東寄りのほぼ床面直上から出土したものであり、内外とも丁寧にヘラ磨きされている。3の坏はカマド右袖近くの床面直上から出土したものであり、内面が黒色処理されている。4の甕は覆土中から出土したものであり、底部は欠損している。

石器(第12図5) 覆土中から出土したものである。径5～5.5cm、長さ8.7cmの玉子形の川原石の端部に溝を付けたものである。溝は幅1cm前後、深さ2mm程度であり、底面には擦痕が明瞭に残っている。

土製品(第12図6) 魚形の焼き物であり、残存長8.2cm、胴径1.4cmを測る。頭部と思われる一端には目を表現したかのような粘土の細工がみられ、また反対側の尾と思われる一端は先端が欠損するものの僅かなそりがみられる。色調は淡赤褐色である。



第12図 7号住居跡出土遺物実測図

番号	器種 (残存量)	口径 器高 底径cm	器形の特徴	調整の特徴		胎土・焼成・色調・その他
				内面	外面	
1	坏 ($\frac{1}{2}$)	12.9 4.9 .	体部外面に稜を有し、 口縁部は大きく外反。	口縁部は横位、 底面は一定方向 のヘラ磨き。	口縁部は横位の ヘラ磨き。底部 はヘラ削り。	胎土は緻密。焼成良好。 明褐色で内面黒色処理。 カマド内出土。

2	坏 ($\frac{1}{8}$)	(12.0) 3.5	体部外面に稜を有し 口縁部は直立。	同上。	同上。	同上。 北壁近く床面出土。
3	坏 (完形)	10.8 3.9 ・	体部外面に軽い稜を 有して、口縁部はや や外反。	全面へら磨き。 方向不明。	口縁部は横ナラ。 底部へら削り。	胎土はやや密。暗褐色 で内面黒色処理。カマ ド右脇の床面出土。
4	甕 ($\frac{1}{8}$)	(11.8) (13.2) —	口縁部は短かく外反。 胴部は球形で、器肉 は厚い。	口縁部は横ナデ。 胴部は横位のへ らナデ。	口縁部は横ナデ。 胴部は縦位のへ ら削り。	胎土は粗。焼成良好。 明赤褐色。覆土中出土。

第3表 7号住居跡出土土器観察表

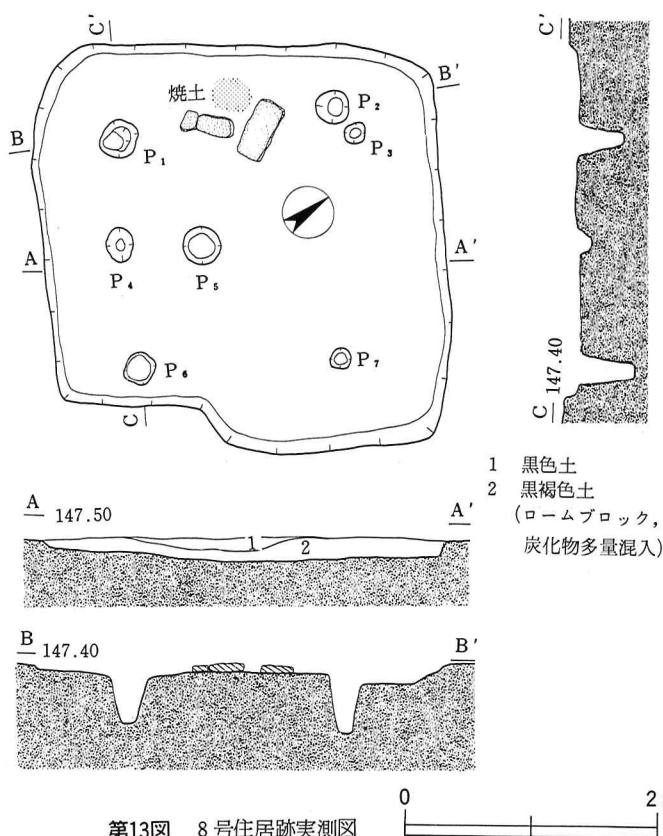
8号住居跡

本住居跡は7号住居跡の西約3mから検出されたものである。平面形は南壁の東半分がやや張り出すものである。大きさは東西が3.2m、南北が短い部分で2.83m、張り出し部の長い部分で3.20mを測り、今回検出された住居跡の中では小型なものである。壁は確認面からの深さが5~15cmと全体に低く、掘り込みの浅いものである。また、床面は全体に細かい凹凸のみられる不整なものであり、踏み固められた面のはっきりしないものである。支柱穴はほぼ対角線上に配された4本(P₁、P₂、P₆、P₇)

であり、それぞれの深さはP₁が35cm、P₂が41cm、P₆が43cm、P₇が38cmである。また、支柱穴間の距離はP₁-P₂が1.75m、P₂-P₇が1.98m、P₆-P₇が1.6m、P₁-P₆が1.82mと不揃いである。なお、他に10~15cm程度の浅いピットが3個(P₃~P₅)検出されているが、P₄は支柱穴P₁-P₆のほぼ中間に位置している。

カマドは、北壁のほぼ中央から検出されたものであるが、燃焼部の掘り込みとおそらく焚口部に使用したとみられる凝灰岩の板石が僅かに残されただけのものである。

なお、出土遺物はまったく検出されていない。

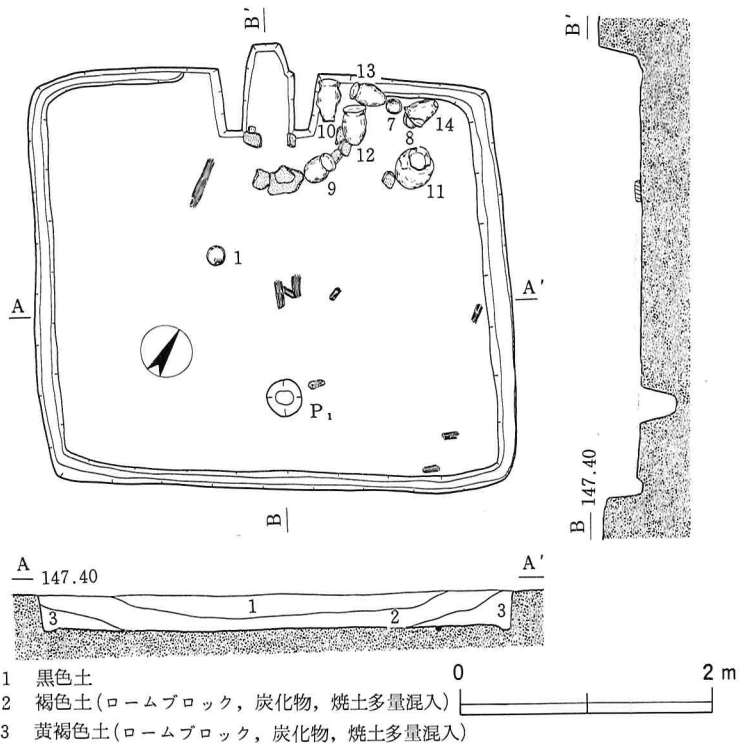


9号住居跡

(1) 遺構について(第14・15図)

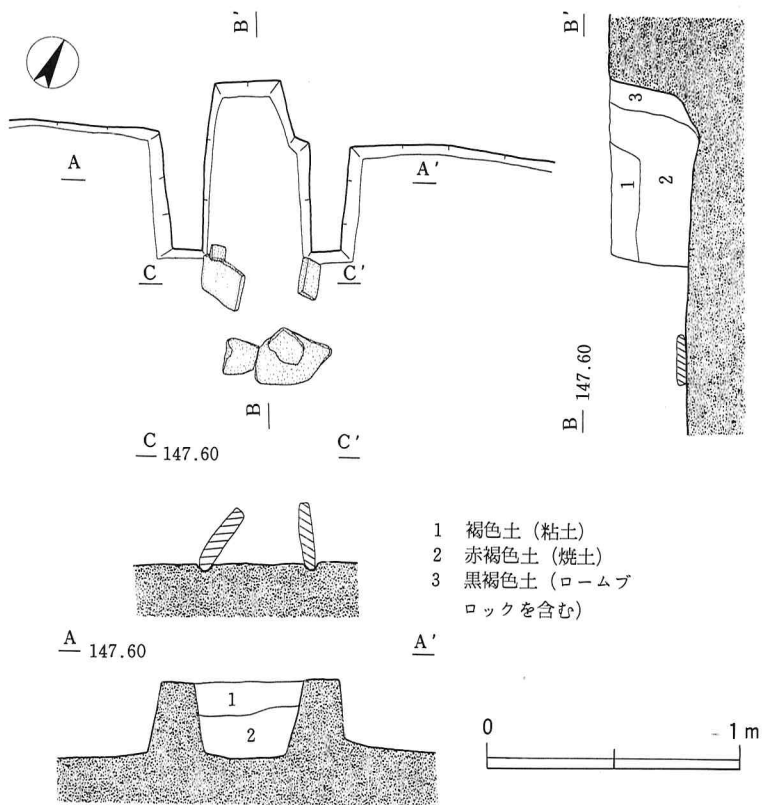
本住居跡は7号住居跡の北西約2mから検出されたものである。平面形は東西にやや長い長方形であり、大きさは南北3.25m、東西3.78mとかなり小型である。壁はロームをしっかりと掘り込んで構築されており、確認面からの深さは全体に25~26cmである。壁の残存状態は非常によく全体にほぼ垂直に近い立ち上がりを検出している。床面はほぼ平坦で、中央部を中心に非常によく踏み固められている。なお、床面からは細かい炭化材が多数検出されており、焼失家屋であった可能性が考えられる。主柱穴は検出されず、南壁寄りの部分にピットが1個検出されたのみである。この小ピットは南壁のほぼ中央から60cmほど内側に位置し、径27~28cm、深さ27cmの円形ピットである。位置的にカマドの向い側ということから、柱穴と考えるよりも入り口に関する施設に係わるものとみた方がよいと思われる。なお、竪穴外も精査したが、柱穴とみられるものは検出されていない。周溝はカマドの部分を除き全周している。幅は西から南側がやや狭く15cm前後、東側がやや広く20cm近い。また、深さは5~6cmで一定している。なお、貯蔵穴は検出されていない。

カマドは北壁のほぼ中央から検出されている。煙道部の壁への掘り込みは、平面形が台形であり、壁からの長さが約25cm、先端部の幅が26cmである。また、立ち上がりの角度は約85°で、垂直に近いものである。袖はロームの削り出しで、確認面においては壁と同じ高さで検出されている。削り出された袖の長さは向って右側が45cm、左側が49cmである。また、両袖を含めた幅は先端部が77cm、壁部がやや広く85cmである。両袖部の先端部内側には、それぞれ凝灰岩の板石が立てられており、この前面にはやや大きい凝灰岩の板石が検出されている。おそらくこの3枚の板石により焚口が構築されていた



第14図 9号住居跡表測図

ものと考えられる。燃焼部の断面は図示したとおりであり、煙道部を除く上層は褐色の粘土である。また、両袖の外面には粘土の貼り付きが検出されている。これらのことから、天井部及び側面は粘土で覆われていたようである。なお、燃焼部はほとんど掘り込みを持たず、煙道部直下が僅かに深くなっているだけである。また、両袖部の内側はローム面が真っ赤に焼けており、直接火を受けていたことを物語っている。



第15図 9号住居跡カマド実測図

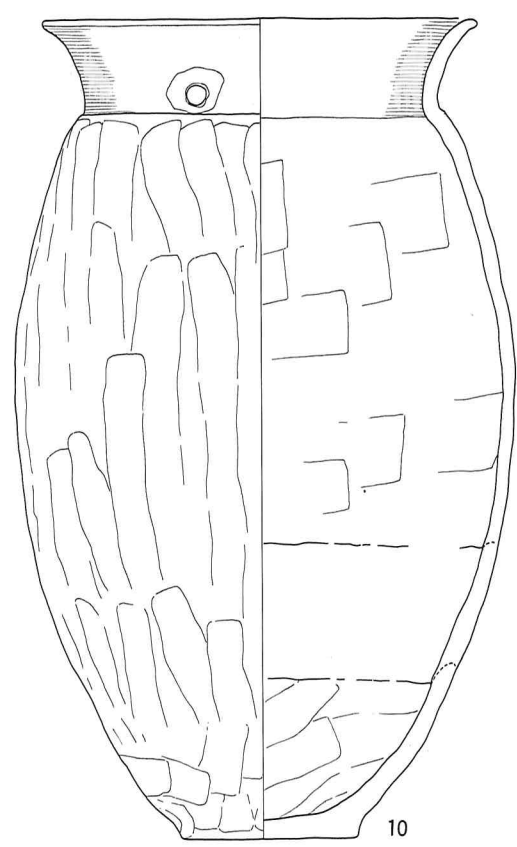
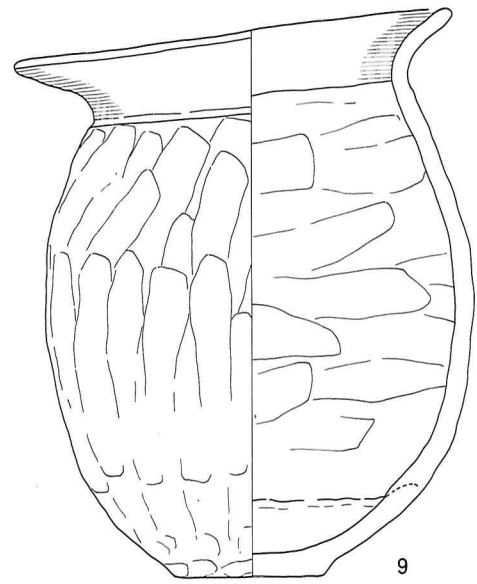
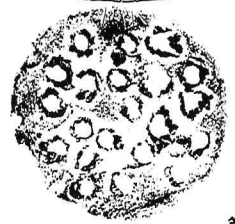
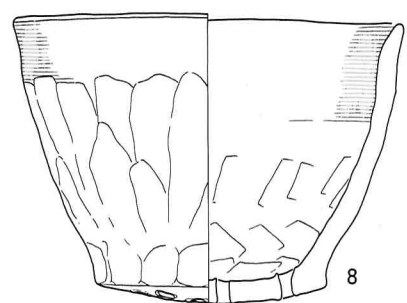
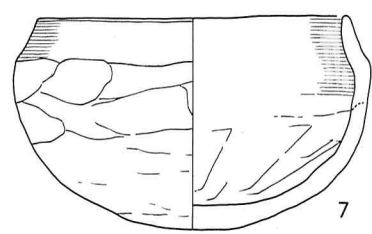
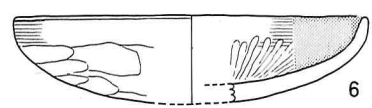
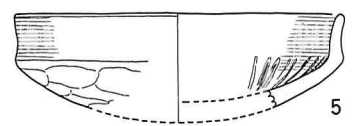
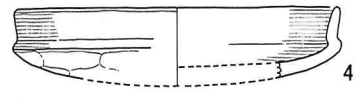
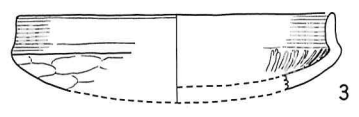
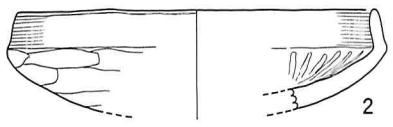
(2) 遺物について(第16～18図)

本住居跡から検出された遺物はすべて土師器である。出土量はかなり多く、図示し得たものは坏6点(1～6)、埴1点(7)、甗2点(8・14)、甕5点(9～13)の計14点を数える。特に集中していたのはカマドの東側部分であり、甕、甗、埴などがほとんど床面に置かれたままの状態で見出されている。

1は住居跡のほぼ中央で床面直上より出土した坏の完成品である。2～6の坏はいずれも覆土中から出土したものであるが、6は内面が黒色処理されている。7の埴はカマド東側部分で多くの甗とともに出土したものである。

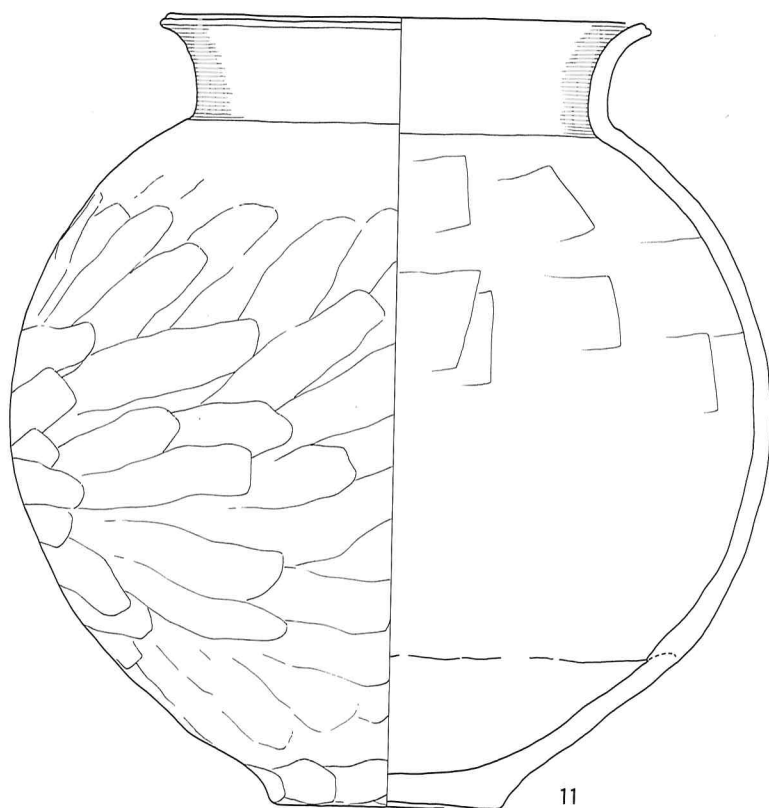
9～13の甕は、いずれもカマドの東側部分から出土したものである。9はやや小形の甕で、カマド右袖の前面に横転していたものである。10及び12、13はいずれも長胴形の甕で、カマド右袖近くに折り重なるようにして出土したものである。なお、10の甕の口縁部には補修孔と思われるものがみられる。11は球胴形の甕で、集中部分からやや離れた位置に、ほぼ立った状態で出土したものである。口唇部に凹線がめぐられるのが特徴で、須恵器の形状を思わせる。

8と14の甗はやはりカマド東側部分から出土したものであり、8に14が被さるような状態で検

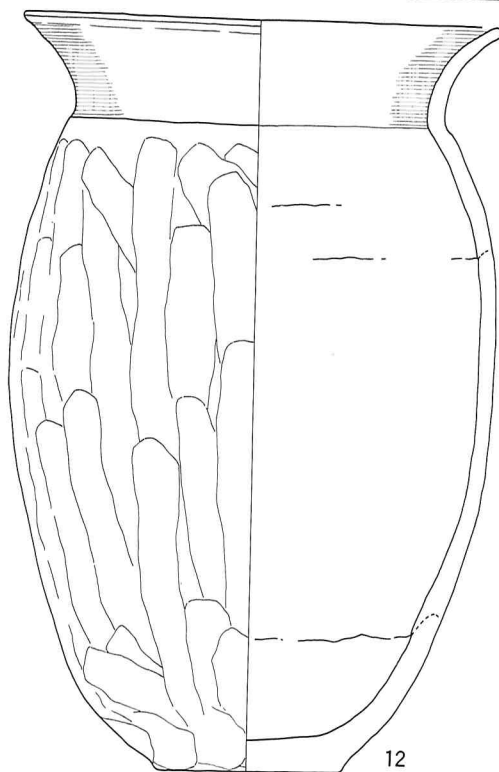


第16图 9号住居跡出土土器実測図(1)

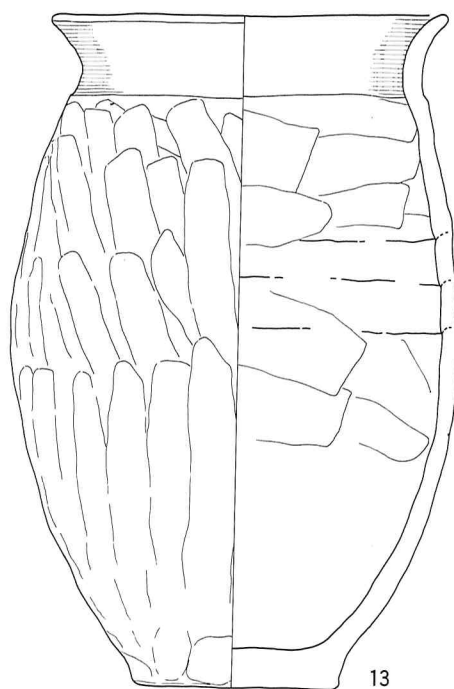
0 10cm



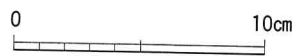
11



12



13

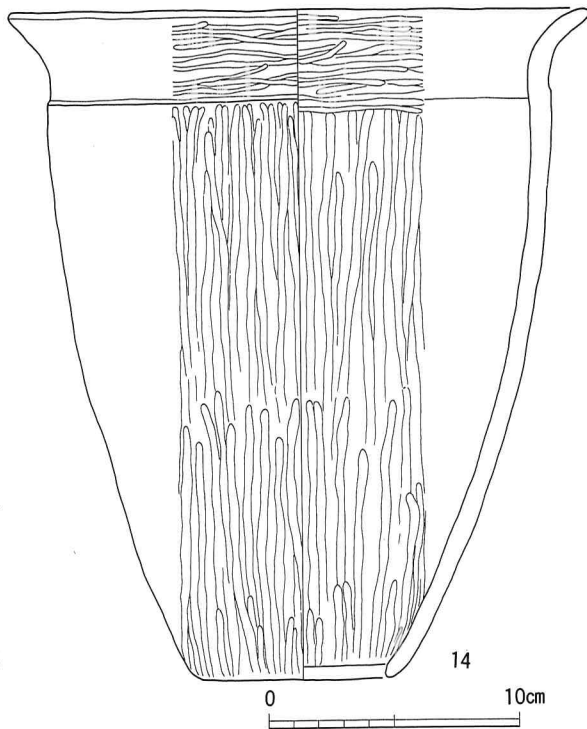


第17图 9号住居跡出土土器実測图(2)

出されている。8は小形の鉢形の甗であり、やや突出気味の底部は多孔式である。孔の数は22と、10号住居跡出土の同形のものより多いが、並びは不規則である。14は大形で単孔の甗であり、内外面とも丁寧なヘラ磨きで仕上げているのが特徴である。

ところで、本住居跡は前述したように焼失家屋であった可能性が高い。従ってこれらの土器の出土状態は、当時の様子をそのままに残している可能性の強いものとして好資料と言える。ただし、甗類の多さに比較して坏、埴類がやや少ない点は気がかりである。

なお、各土器の法量及び調整の特徴は次表に示したとおりである。



第18図 9号住居跡出土土器表測図(3)

番号	器種 (残存量)	口径 器高 底径cm	器形の特徴	調整の特徴		胎土・焼成・色調・その他
				内面	外面	
1	坏 (完形)	13.9 4.3 .	体部外面に沈線状の稜を有し、口縁部は内傾する。	口縁部横ナデ。底面はヘラ磨きか？	口縁部は横ナデ。底部ヘラ削り。	胎土はやや粗。焼成やや不良。褐色。床面出土。
2	坏 (1/4)	(14.0) (3.9) .	体部外面に稜を有し口縁部は内傾。	口縁部は横ナデ。底面は放射状のヘラ磨き。	同上。	胎土は緻密。色調は褐色。覆土中出土。
3	坏 (1/4)	(12.4) (3.5) .	体部外面に稜を有し、口縁部は直立。	同上。	同上。	胎土は緻密。焼成やや不良。暗褐色。覆土中出土。
4	坏 (1/5)	(12.7) (3.1) .	体部外面に稜を有し、口縁部はやや外傾。	口縁部および底面横ナデ。	同上。	胎土は密。焼成やや不良。暗赤褐色。覆土中出土。
5	坏 (1/4)	(12.8) (4.3) .	体部外面に稜を有し口縁部は外反気味に直立。	全面横ナデ後、底面に粗い放射状のヘラ磨き。	同上。	胎土はやや密。焼成やや不良。暗褐色。覆土中出土。
6	坏 (1/4)	(13.8) (3.5) .	扁平な半球形状。	口縁部は横ナデ。底面は放射状のヘラ磨き。	同上。	胎土は緻密。焼成良好。褐色で内面黒色処理。

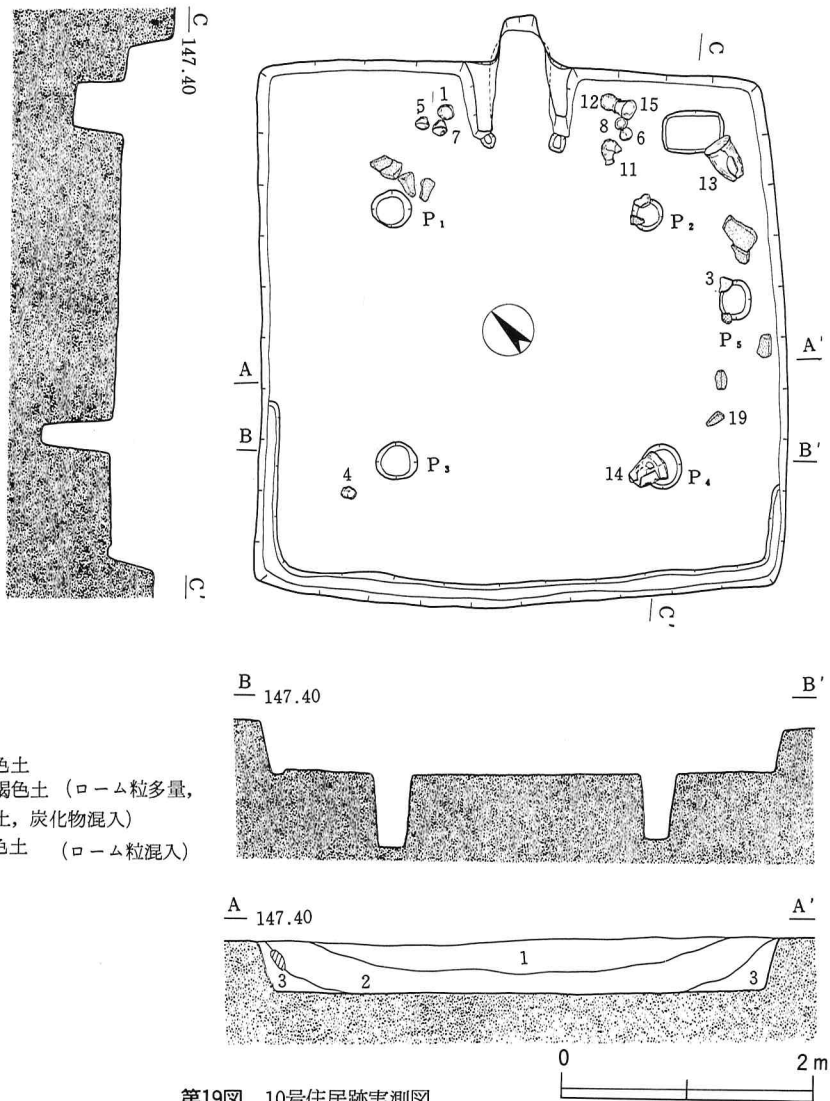
7	甕 (完形)	12.1 8.4 ・	口縁部は内傾。体部は球形。	口縁部から体部上半横ナデ。以下ヘラナデ。	口縁部は横ナデ。体部は横位のヘラ削り。底部は指ナデ。	胎土はやや粗。焼成良好。暗褐色。カマド右脇の床面出土。
8	甕 (完形)	15.2 11.5 9.0	小形で多孔式(22孔)。口縁部はわずかに外反。	口縁部から胴部上半横ナデ。以下ヘラナデ。	口縁部は横ナデ。胴部は縦位のヘラ削り。	胎土はやや粗。色調は褐色。カマド右脇の床面出土。
9	甕 (完形)	17.3 22.1 5.8	口縁部は大きくくの字に外反。胴部は膨らみ中位に最大径(17.0)。	口縁部は横ナデ。胴部は横位のヘラナデ。	口縁部は横ナデ。胴部は縦位のヘラ削り。底部はヘラ削り。	胎土は粗。焼成良好。暗赤褐色。カマド前面の床面出土。
10	甕 (1/2)	(17.2) 32.2 7.0	口縁部は外面に稜をもって外反。胴部はやや膨む長胴で、中位に最大径(19.6)。	同上。	同上。底部付近のみ横位のヘラ削り。	胎土は粗。焼成やや不良。暗褐色で外面にスス附着。カマド右袖部脇より出土。
11	甕 (完形)	18.8 31.0 9.0	口縁部は外湾し、端部に凹線が入る。胴部は球形で、底部やや突出気味。	同上。	口縁部は横ナデ。胴部は横位のナデ気味ヘラ削り。底部はヘラ削り。	胎土は粗。暗赤褐色。カマド右脇床面出土。底部は木葉痕の上をヘラ削り。
12	甕 (完形)	18.6 29.6 7.3	口縁部は大きく外反。胴部は長胴で、やや上位に最大径(19.1)。	口縁部は横ナデ。胴部はヘラナデか？	口縁部は横ナデ。胴部は縦位のヘラ削り。	胎土は粗。暗褐色。カマド右脇の床面出土。底部は木葉痕。
13	甕 (完形)	15.5 26.5 7.7	口縁部は外反。胴部はやや膨らみ、中位に最大径(17.7)。	口縁部は横ナデ。胴部は横位のヘラナデ。	同上。底部は木葉痕。	胎土は粗。焼成やや不良。暗褐色。カマド右脇の床面出土。
14	甕 (完形)	22.8 26.3 7.6	大形で単孔式。口縁部は外面に稜をもって外反。	口縁部は横位、胴部は縦位のヘラ磨き。	同左。	胎土は粗。焼成良好。暗褐色、カマド右脇の床面出土。

第4表 9号住居跡出土土器観察表

10号住居跡

(1) 遺構について(第10・11図)

本住居跡は8号住居跡の西約1mから検出されたものである。平面形はほぼ方形であるが、南および東壁は心もち胴張りになる。大きさは南北4.3m、東西4.2mである。壁の掘り込みは本遺跡の中では比較的深く、35～40cmである。また、立ちあがり角度は80～85°と、比較的急である。床面はほぼ平坦であり、カマド前面および主柱穴に囲まれた部分はよく踏み固められている。主柱穴はほぼ対角線上に配された4本(P₁～P₄)であり、それぞれの深さはP₁が49cm、P₂が50cm、P₃が56cm、P₄が53cmとほぼ50cm前後に一致している。また、各主柱穴間の距離はP₁－P₂が2.04m、P₃－P₄が2.1m、P₁－P₃が1.98m、P₂－P₄が2.0mである。なお、東壁中央から約20m内側で検出されたP₅は、深さ24cmの楕円形のピットであり、位置的にみて入り口の施設に関するものと考えられる。周構は全周せず、南壁部を中心に検出されている。検出された周構は幅が



10~15cm, 深さ4~5cmの浅いものである。貯蔵穴はカマドの向って右側, 北東コーナー近くより検出されている。平面形はやや隅丸の長方形であり, 大きさは34×37cmである。また, 底面はほぼ平坦で床面からの深さは38cmである。

カマドは北壁のほぼ中央から検出されている。煙道部の壁への掘り込みは平面が台形状であり, 壁からの長さが約40cm, 先端部の幅が24cmである。また, 立ち上がりの角度は約80°と急である。袖はロームの削り出しであり, 高さは両袖とも25cm前後と住居跡の壁よりもやや低くなっている。この削り出された袖の長さは, 向って右側が44cm, 左側が51cmであり, 両袖を含めた幅は先端部で78cm, 壁部で95cmである。両袖の先端やや内側には, それぞれ深さ3~

4 cmの楕円形ピットが検出されている。これは6号や9号住居跡の例からみて、焚口部を構築する石材を埋めた穴と考えられる。支柱穴P₁の近くや東壁沿いに検出された凝灰岩の破片は、おそらくこのカマドに使用されたものと考えられる。図示した横断面でよくわかるように、燃烧部の上層および削り出された袖部の外面には褐色の粘土がみられる。このことから、天井部および側面の調整には粘土が使用されていたことがうかがえる。燃烧部の掘り込みはほとんどみられないが、床面よりは数センチ下っている。なお、燃烧部の底面は楕円形となっており、このため袖の内面は

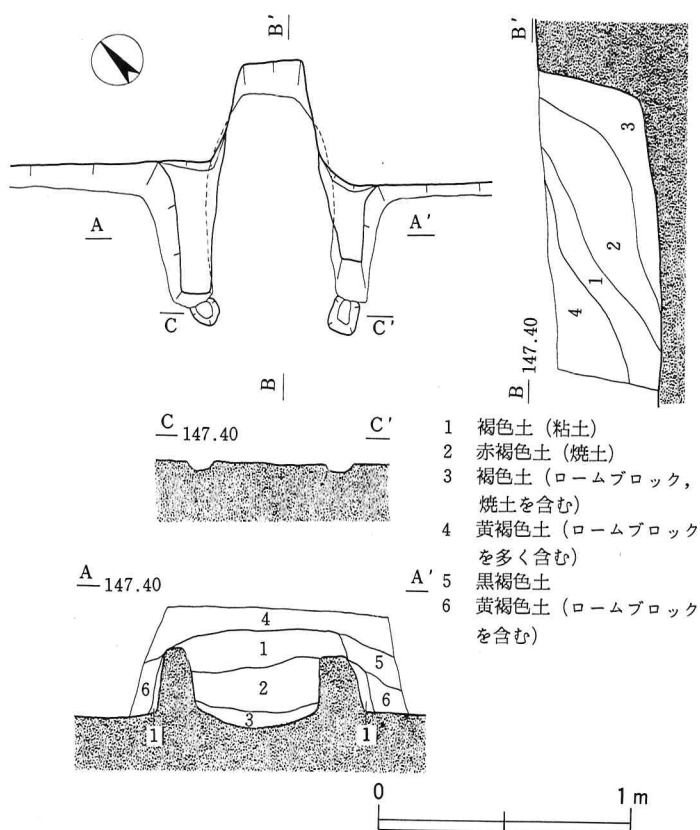
一部オーバーハング気味に削り出されている。また、直接火を受けていたことを物語るように、内面のロームは真っ赤に焼けている。

(2) 遺物について

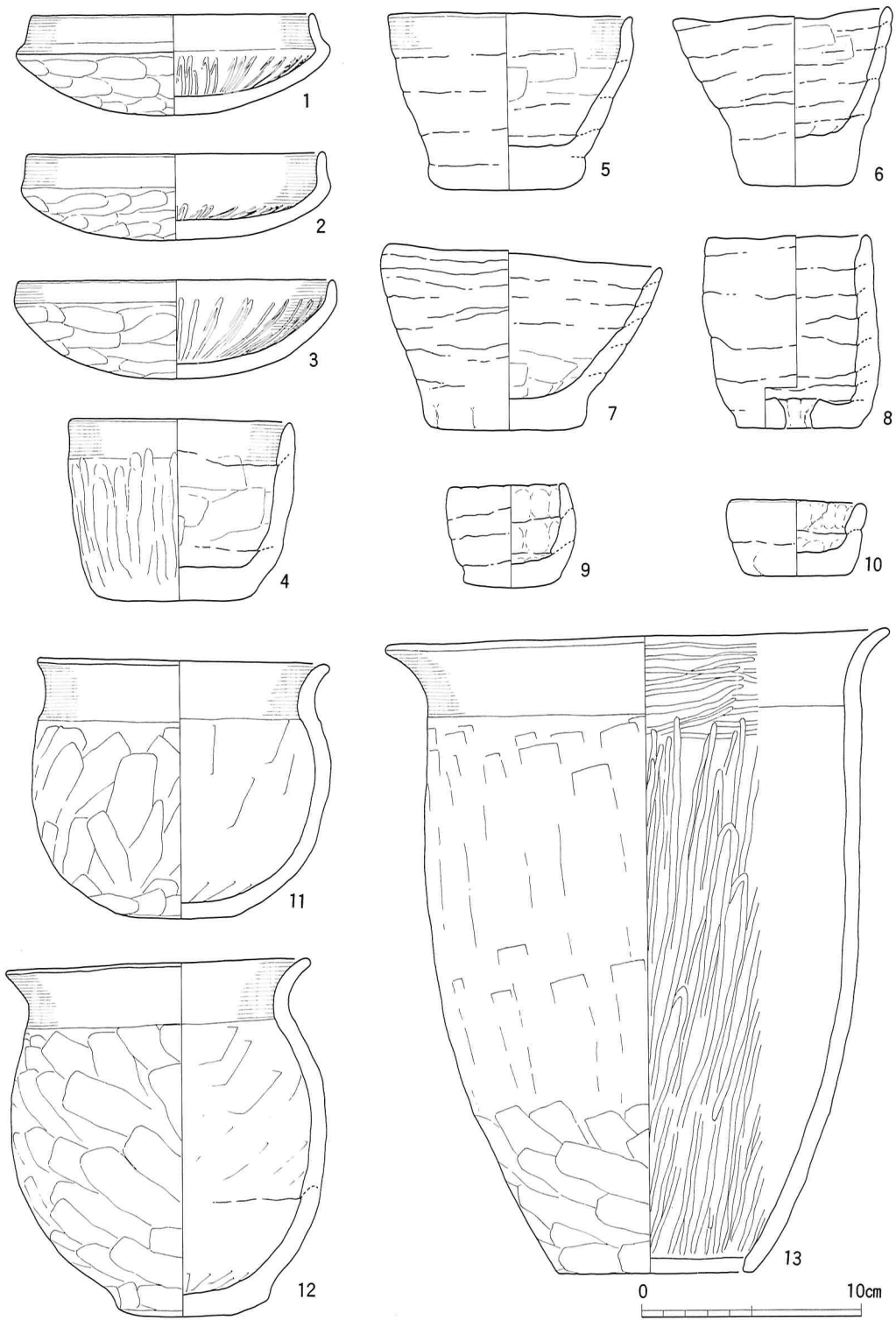
本住居跡から検出された遺物は土器と石製品である。

土器(第21・22図) 検出されたものはすべて土師器であり、そのうち図示し得たのは坏3点(～3)、手づくね土器7点(4～10)、甕5点(11, 12, 16～18)、甗3点(13～15)の計18点である。

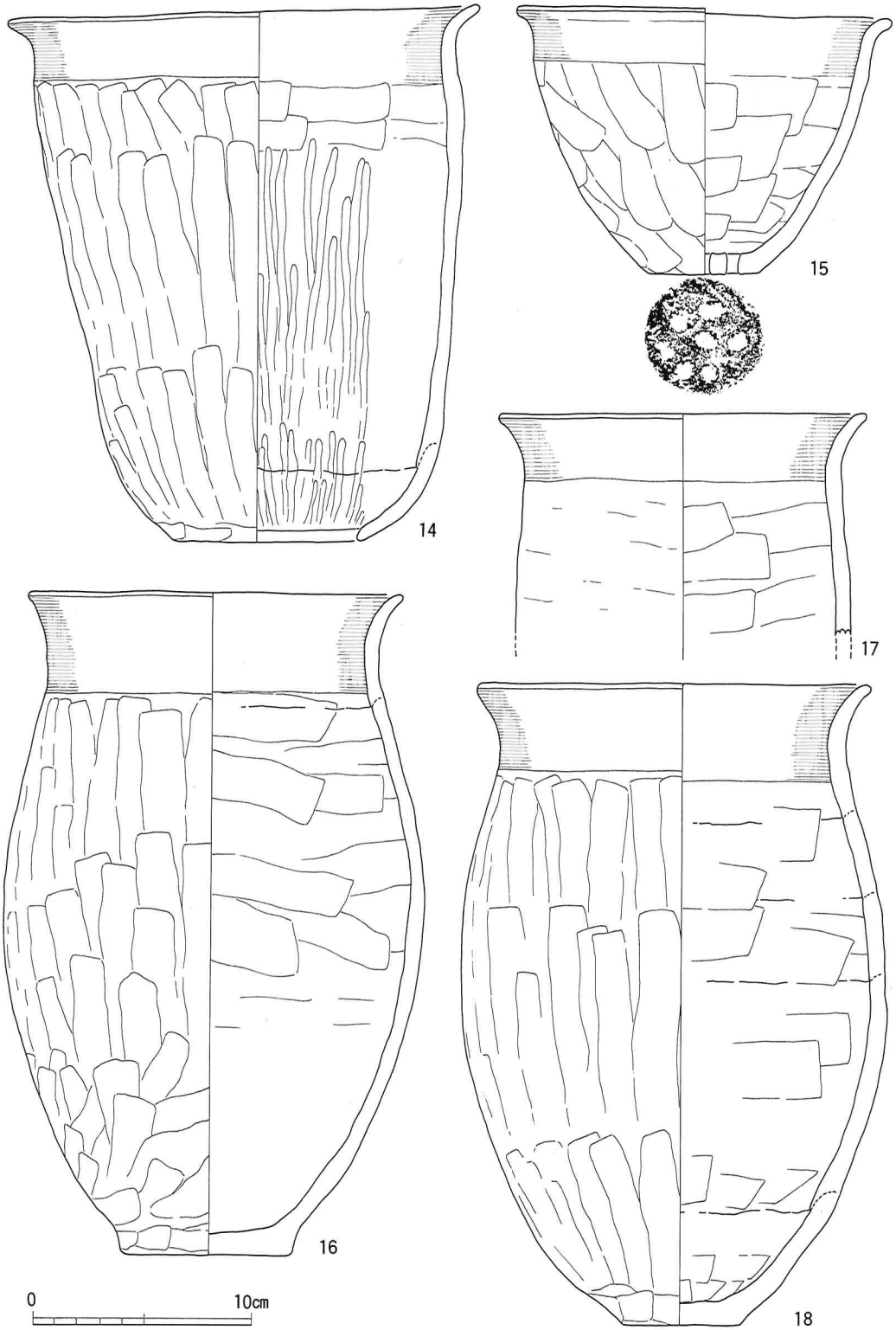
1はカマドのすぐ西側から出土した坏で完成品である。2と3の坏は破片で、2は覆土下層からまた3はP₃近くの床面からそれぞれ出土したものである。4～8はやや大形の手づくね土器であり、4は支柱穴P₃の近くから、5, 7はカマドの西側から、6, 8はカマドの東側からそれぞれ床面直上より検出されたものである。いずれもやや深みのあるコップ形をしたものであるが、8だけは底部中央に径1 cm弱の小孔がみられる。おそらく甗を意識して作られたものと考えられる。9, 10はやや小さめの手づくね土器であり、いずれも覆土下層から出土したものである。11, 12は小形の甕であり、いずれもカマド東側の床面から出土したものである。16～18は長胴形



第20図 10号住居跡カマド実測図



第21图 10号住居跡出土土器実測图(1)



第22图 10号住居跡出土土器実測図(2)



第23図 10号住居跡出土
石製品実測図

の甕であるが、いずれも支柱穴P₁に近い位置で覆土下層からかなりの破片となった状態で出土したものである。13, 14は大形で単孔の甕である。いずれもほぼ完成品であり、13は貯蔵穴のすぐそばから、14は支柱穴P₄に被さるようにしてそれぞれ出土したものである。15は小形で鉢形の甕であり、底部に7つの小孔が穿たれた多孔式である。出土状態が興味深く、カマド東側において12の小形甕にささった状態で横転していたものである。おそらく、2つの土器を重ねてカマド東側に置いてあったものであろう。

石製器(第23図) 支柱穴P₄の近くの床面直上から検出されたものである。長さ約17.0cm, 最大幅6.5cmで、厚さ3cm前後の偏平な石である。特に明瞭な調整痕や使用痕はみられないが、何かに使用されていたものと考えられる。なお、各出土土器の特徴は第5表に示したとおりである

番号	器種 (残存量)	口径器高 底径cm	器形の特徴	調整の特徴		胎土・焼成・色調・その他
				内面	外面	
1	坏 (完形)	12.7 4.5 .	体部外面に稜を有し 口縁部は内傾する。	口縁部は横ナデ。 底面は放射状へ ラ磨き。	口縁部は横ナデ。 底部へラ削り。	胎土はやや粗。焼成良 好。暗茶褐色。カマド 左脇の床面出土。
2	坏 ($\frac{3}{8}$)	13.3 3.9 .	体部外面に軽を稜を 有し、口縁部は直立 する。	全面横ナデ後、 底面に放射状の へラ磨き。	同上。	胎土はやや粗。焼成や や良好。暗褐色。覆土 下層出土。
3	坏 ($\frac{3}{8}$)	14.1 4.5 .	半球形状。口縁部は 短かく直立。	全面横ナデ後、 底面に粗い放射 状のへラ磨き。	同上。	胎土はやや密。焼成は 良好。茶褐色。床面出 土。
4	坏 (完形)	9.8 8.2 6.9	平底。体部はほぼ直 立し、コップ状。	口縁部横ナデ。 体部へラナデ。	口縁部横ナデ。 体部は幅の狭い 縦位のへラナデ。	胎土は密。色調は暗褐 色。床面出土。
5	坏 (完形)	10.9 8.0 6.5	平底。体部は開いて 立ち上がり、口縁部 は直立。	同上。	口縁部横ナデ。 他は手づくね。	胎土は密。色調は暗褐 色。カマド左脇の床面 出土。
6	坏 (完形)	9.8 7.6 4.8	平底。体部は開いて 立ち上がる。	同上。	手づくね。	胎土は密。色調は灰褐 色。カマド右脇の床面 出土。
7	坏 (完形)	12.3 8.4 6.7	平底。体部はかなり 開いて立ち上がる。	同上。 へラナデは底面 のみ。	同上。	胎土は密。色調は暗褐 色。カマド左脇の床面 出土。
8	甕形 (完形)	7.2 8.7 5.5	平底で中央に単孔。 体部はほぼ直立し、 コップ状。	手づくね。	同上。	胎土は密。色調は暗褐 色。カマド右脇の床面 出土。

9	坏 (完形)	5.2 4.7 4.3	平底。体部は内湾気味に立つ。	同上。	同上。	胎土は密。色調は暗灰褐色。覆土下層出土。
10	坏 (完形)	6.0 3.5 4.7	平底。	同上。	同上。	胎土は密。色調は灰褐色。覆土下層出土。
11	甕 ($\frac{3}{4}$)	13.1 11.6 5.5	口縁部は外反。胴部は球形。平底。	口縁部は横ナデ。胴部は横位のヘラナデ。	口縁部は横ナデ。胴部は斜位のヘラ削り。	胎土は粗。焼成は良好。明褐色。カマド右脇の床面出土。
12	甕 (完形)	13.6 15.9 6.9	口縁部は外反。胴部は球形で、底部が突出気味。	同上。	同上。	胎土は粗。焼成は良好。赤褐色。カマド右脇の床面出土。
13	甕 (完形)	22.7 28.7 8.9	口縁部は大きく外反。大形で単孔。	口縁部が横位、胴部が縦位のヘラ磨き。	口縁部は横ナデ。胴部は上半が縦位のヘラナデ、下半が斜位のヘラ削り。	胎土はやや粗。焼成は良好。明赤褐色。貯蔵穴そばの床面出土。
14	甕 (完形)	21.5 24.1 8.6	口縁部は短かく外反。大形で単孔。	口縁部は横ナデ。胴部は横位のヘラナデ後、縦位のヘラ磨き。	口縁部は横ナデ。胴部は縦位のヘラ削り。	胎土は粗。色調は褐色。P ₄ そばの床面出土。
15	甕 (完形)	17.2 12.2 5.0	口縁部はわずかに外反。小形、多孔(7孔)。	口縁部は横ナデ。胴部はヘラナデ。	口縁部は横ナデ。胴部は縦位のヘラ削り。	胎土はやや密。色調は淡褐色。カマド右脇で15の上より出土。
16	甕 ($\frac{2}{3}$)	17.0 30.0 7.8	口縁部はゆるく外反。胴部は膨らみのある長胴で、中位に最大径(19.2)。	口縁部は横ナデ。胴部は横位のヘラナデ。	口縁部は横ナデ。胴部は上半が縦位、下半が斜位から横位のヘラ削り。	胎土は粗。色調は暗赤褐色。覆土下層出土。
17	甕 ($\frac{1}{4}$)	16.8 (10.1) —	口縁部は外反。胴部は長胴か？	同上。	口縁部は横ナデ。胴部はナデか？	胎土は粗。色調は明褐色。覆土下層出土。
18	甕 ($\frac{3}{4}$)	17.8 29.2 5.4	口縁部は外反。胴部は膨らみのある長胴で、中位に最大径(19.4)。	同上。	口縁部は横ナデ。胴部は縦位のヘラ削りで底部近くは横位。	胎土は粗。焼成やや不良。暗褐色。覆土下層出土。

第5表 10号住居跡出土土器観察表

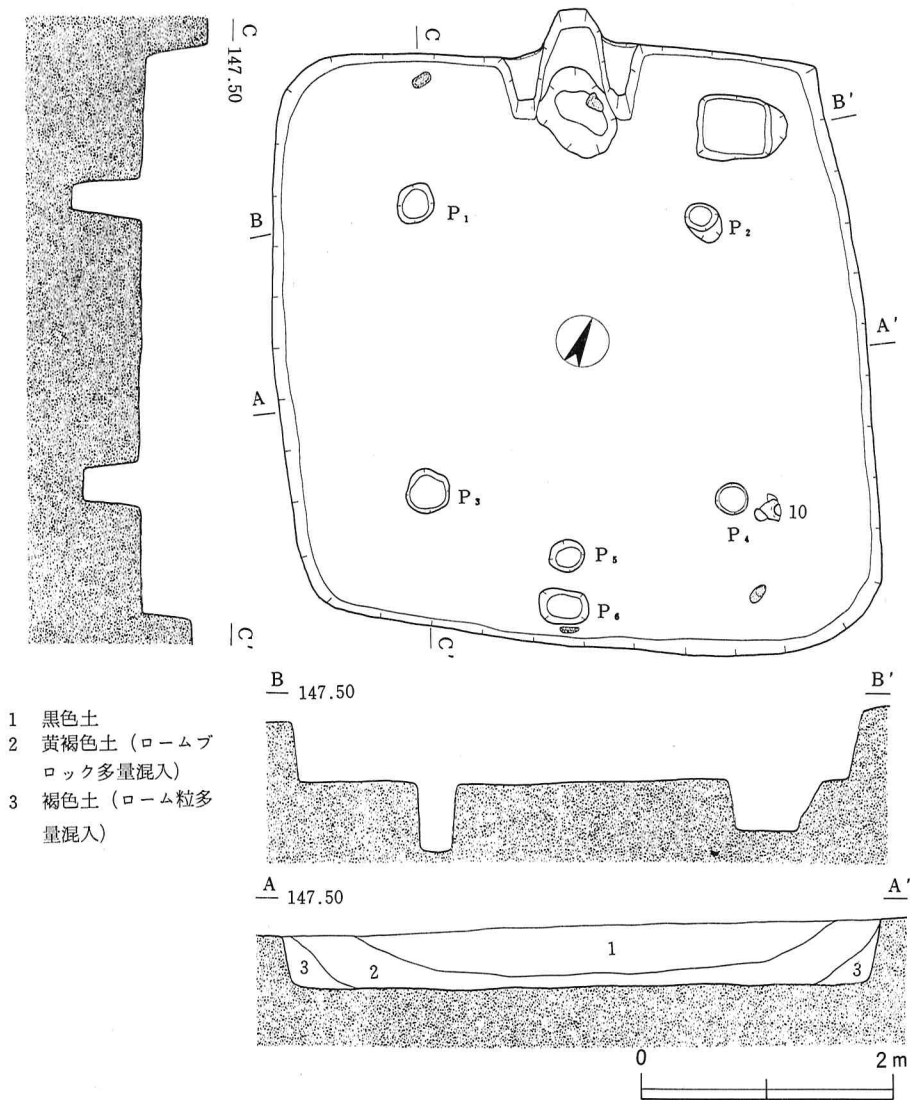
11号住居跡

(1) 遺構について(第24・25図)

本住居跡は10号住居跡の北西約3mから検出されたものである。平面形はやや不整な方形で、北東コーナー以外は隅丸気味である。大きさは南北が4.75m、東西が4.7mである。壁は45~55cmと本遺跡で最も深さをもつものであり、立ち上がり角度は80°前後である。床面はほぼ平坦でカ

マド前面から中央部にかけてはよく踏み固められている。支柱穴はほぼ対角線上に配された4本(P₁~P₄)であり、それぞれの深さはP₁が54cm, P₂が47cm, P₃が45cm, P₄が43cmである。また、支柱穴間の距離はP₁-P₂が2.25m, P₃-P₄が2.40m, P₁-P₃が2.25m, P₂-P₄が2.25mである。南壁のほぼ中央付近からは2個のピット(P₅・P₆)が検出されている。いずれも深さ15cmほどの浅いものであり、P₅は円形、P₆は楕円形である。おそらく入り口の施設に関わるものとみられる。貯蔵穴はカマドに向って右側、北東コーナー寄りから検出されている。平面形は60×50cmのやや東西に長い長方形で、深さは43cmである。なお、周構は検出されていない。

カマドは北壁のほぼ中央から検出されている。煙道部の壁への掘り込みは平面形が台形状であ



第24図 11号住居跡実測図

り、壁からの長さが約35cm、先端部の幅が28cmである。なお、立ち上がりの角度は80°弱である。

袖はロームの削り出しであり、床面からの高さは両袖とも34～35cmである。また、この削り出された袖の長さは向って右側が45cm、左側が39cmであり、両袖を含めた幅は先端部で91cm、壁部で110cmである。図で示した断面からもわかるように天井部は褐色の粘土で構築されていたものとみられ、さ

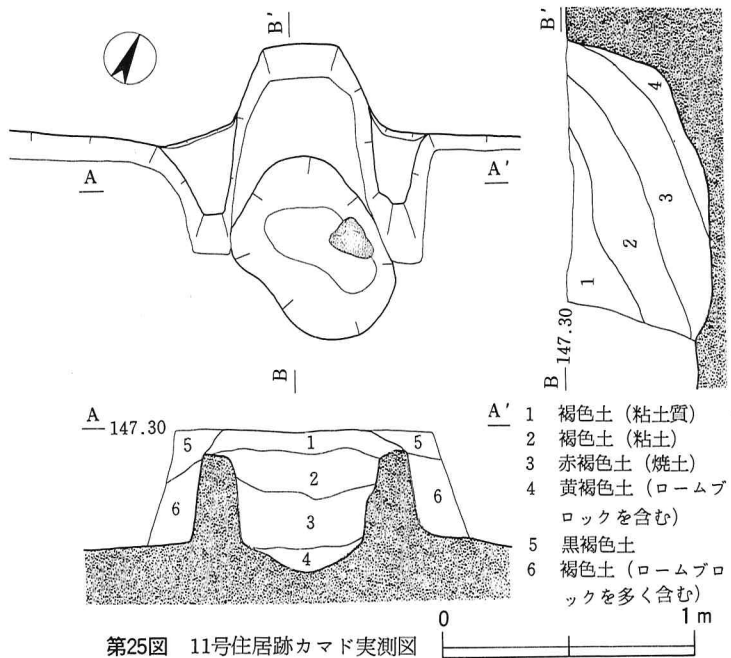
らに、削り出された袖部の外面に粘土が付着していたことから、側面も粘土によって調整されていたことがうかがえる。なお、燃焼部には平面形が70×50cm程度の不整形で、深さが約10cmの掘り込みがみられる。また、他の住居跡でみられるような袖部先端焚口部の板石は検出されず、それを埋めたとみられる痕跡も確認されていない。

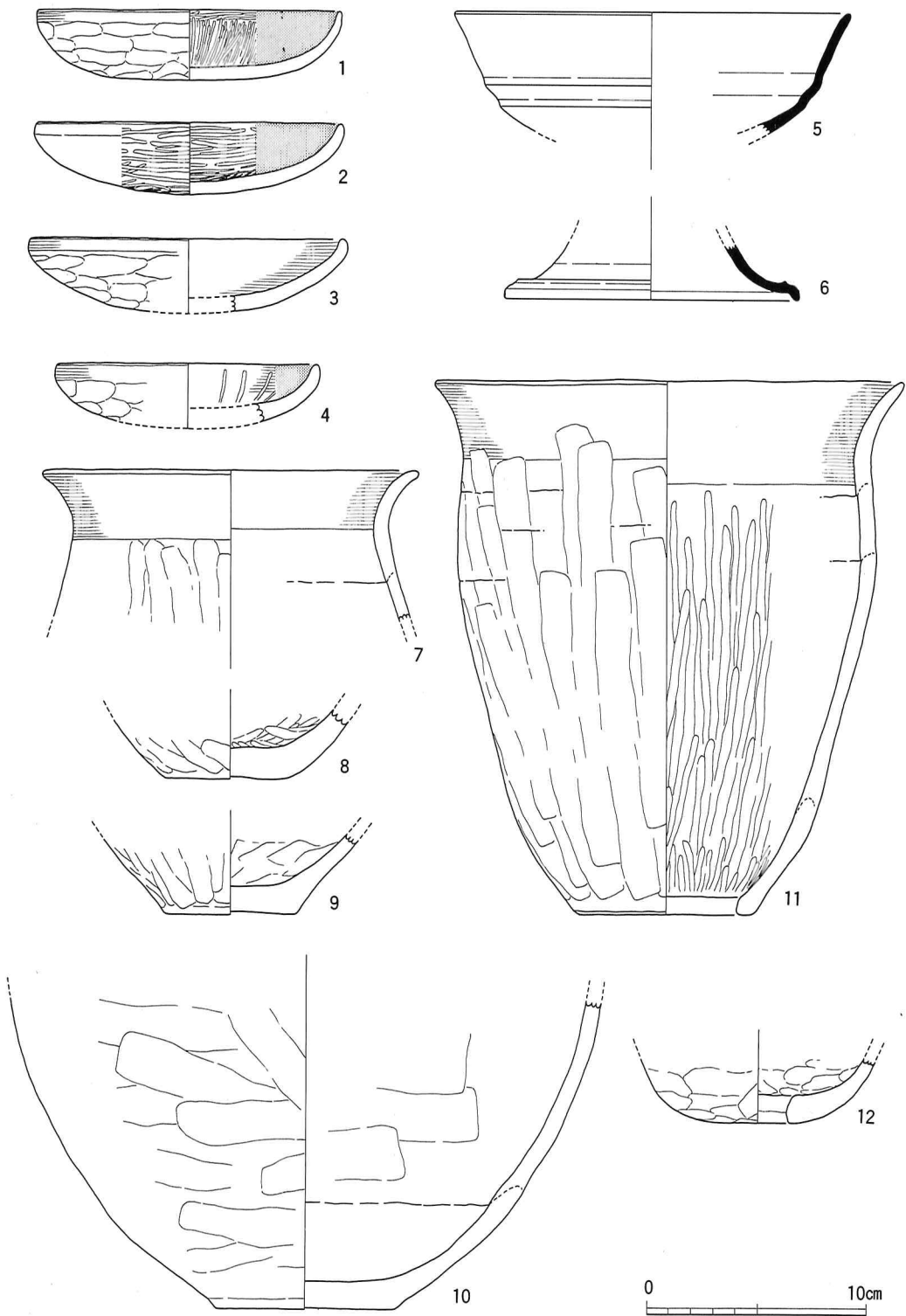
(2) 遺物について(第26図)

本住居跡から検出された遺物はすべて土器であり、そのうち図示し得たのは土師器10点(1～4, 7～12)と須恵器2点(5・6)の計12点である。これらは大部分が覆土の中～上層にかけて出土したものであり、床面から検出されているのは10の甕のみである。

1～4の土師器坏はいずれも半球形状の浅いものであり、1・2は内面黒色処理されている。5・6は須恵器高坏であり、5が坏部、6が裾部の破片である。胎土や作りの様子から同一個体とみられるもので、坏部には2段の稜、裾部近くには1段の稜がめぐらされている。7～10は土師器甕であり、7が口縁部、8・9が底部、10が胴下半から底部の破片である。10はやや球胴に近いものであり、やや大形になるとみられる。11は大形単孔の甕であり、胴部の内面はヘラ磨きされている。また、12は底部だけの破片であるが、おそらく小形で鉢形になる甕とみられる。底部は径約3cmの孔が中心部に1個あけられたものであり、9・10号住居跡出土の小形甕のような多孔式とは異っている。

なお、各出土土器の法量や調整の特徴等については、第6表に示したとおりである。





第26图 11号住居跡出土土器実測図

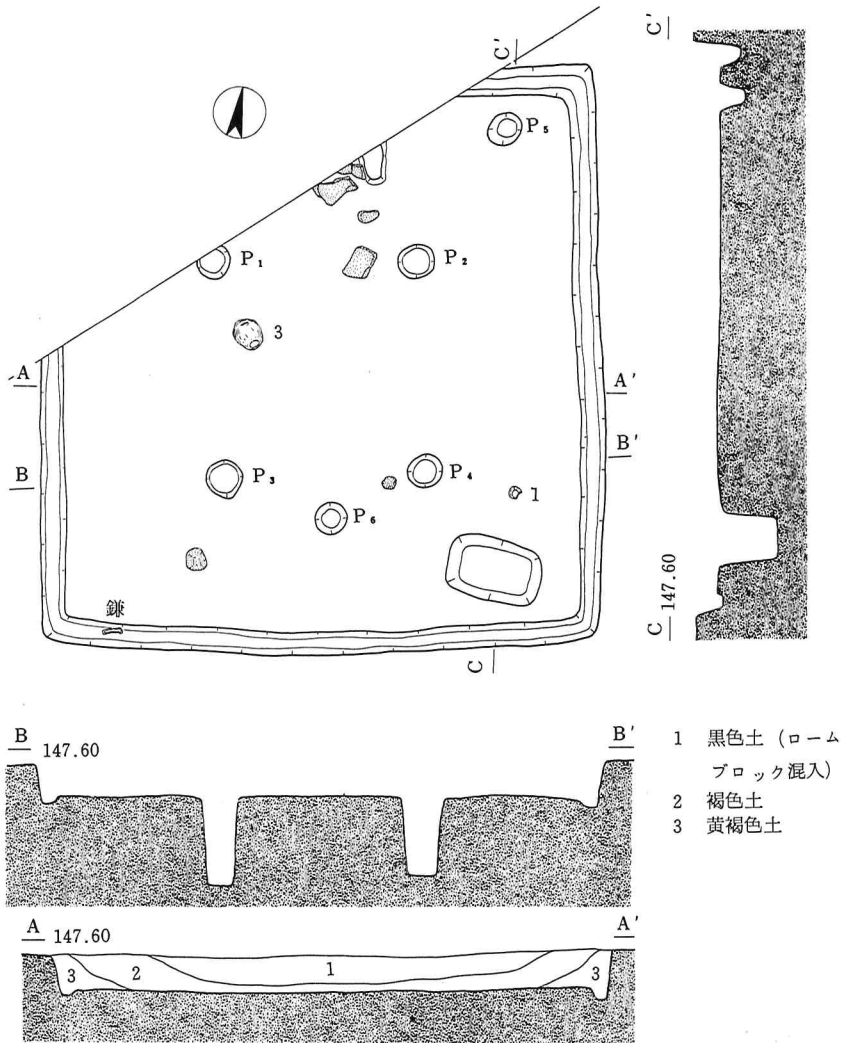
番号	器種 (残存量)	口径 器高 底径cm	器形の特徴	調整の特徴		胎土・焼成・色調・その他
				内面	外面	
1	坏 ($\frac{3}{4}$)	13.7 3.2 ・	扁平な半球形状。口縁部はわずかに直立し、端部が尖り気味。底部がやや平ら。	口縁部が横位、底面が放射状の密なヘラ磨き。	口縁部は横ナデ。底部ヘラ削り。底部に木葉痕がわずかに残る。	胎土は密。焼成やや良好。明褐色で内面黒色処理。覆土中出土。
2	坏 ($\frac{3}{4}$)	13.8 3.3 ・	扁平な半球形状。口縁部はわずかに直立。	全面横位（4単位）の密なヘラ磨き。	ヘラ削り後、横位のヘラ磨き。	胎土は緻密。焼成良好。暗褐色で内面黒色処理。覆土中出土。
3	坏 ($\frac{1}{2}$)	(14.0) (3.4) ・	同上。	全面横ナデ。	口縁部は横ナデ。底部はヘラ削り。	胎土はやや密。焼成良好。明褐色。覆土中出土。
4	坏 ($\frac{1}{4}$)	(11.6) (2.9) ・	同上。小形。	全面横ナデ後、粗い放射状のヘラ磨き。	同上。	胎土は密。焼成良好。暗褐色で内面黒色処理。覆土中出土。
5	高坏 (坏部 $\frac{1}{2}$)	(17.8) (5.5) —	体部外面に2つの段を有して、口縁部は外へ開く。	ロクロナデ。	ロクロナデ。	胎土はやや密。焼成良好。青灰色。覆土上層出土。
6	高坏 (脚部 $\frac{1}{2}$)	— (2.4) (13.4)	ラップ状に広がり、端部は外面に稜を有して外下方へ折れる。	同上。	同上。	同上。
7	甕 ($\frac{1}{6}$)	(16.8) (6.7) —	口縁部は外反。胴部はやや膨れるか？	口縁部は横ナデ。	口縁部は横ナデ。胴部は縦位のヘラ削り。	胎土はやや粗。焼成やや良。暗褐色。覆土中出土。
8	甕 (底部)	— — 5.8	底部のみ。	ヘラナデ。	縦位のヘラ削り。	胎土はやや粗。焼成やや不良。暗褐色。覆土中出土。
9	甕 (底部)	— — 5.8	同上。	同上。	同上。	胎土は粗。焼成やや不良。暗褐色。覆土中出土。
10	甕 ($\frac{1}{2}$)	— (14.0) 8.0	胴下半部，球胴。	横位のヘラナデ。	横位のヘラ削り。	胎土はやや粗。焼成やや不良。明褐色。床面出土。
11	甕 (完形)	21.3 24.1 7.9	口縁部は外反。大形で単孔。	口縁部は横ナデ。胴部は縦位のヘラ磨き。	口縁部は横ナデ。胴部は縦位のヘラ削り。	胎土はやや粗。焼成やや不良。茶褐色。覆土中出土。
12	甕 (底部)	— (2.9) 2.6	小形で単孔。	ヘラナデ。	横位のヘラ削り。	胎土はやや粗。焼成やや不良。淡褐色。覆土中出土。

第6表 11号住居跡出土土器観察表

12号住居跡

本住居跡は7号住居跡の北約2mから検出されたものである。北東部が調査地区外に延びているものであるが、他の3つのコーナーは検出しているため、平面形や規模はおさえることができ

る。平面形はほぼ方形で、南北4.35m、東西4.45mの整美な竪穴住居跡である。壁の掘り込みは約30cmであり、立ち上がり角度は85°前後と垂直に近い。床面はほぼ平坦で、カマド前面から中央にかけては良く踏み固められている。周溝は幅が15cm前後、深さが5~10cmであり、確認した部分では全周している。支柱穴はほぼ対角線上に配された4本(P₁~P₄)であり、それぞれの深さはP₁が58cm、P₂が51cm、P₃が67cm、P₄が60cmである。また、支柱穴間の距離はP₁-P₂が1.60m、P₃-P₄が1.59m、P₁-P₃が1.62m、P₂-P₄が1.60mであり、比較的内側に寄っている。P₅・P₆は20cm前後の浅いピットである。貯蔵穴は南東コーナーから検出されており、75×50cmの隅丸長方形の平面形で深さは43cmである。なお、カマドは北壁のほぼ中央である。



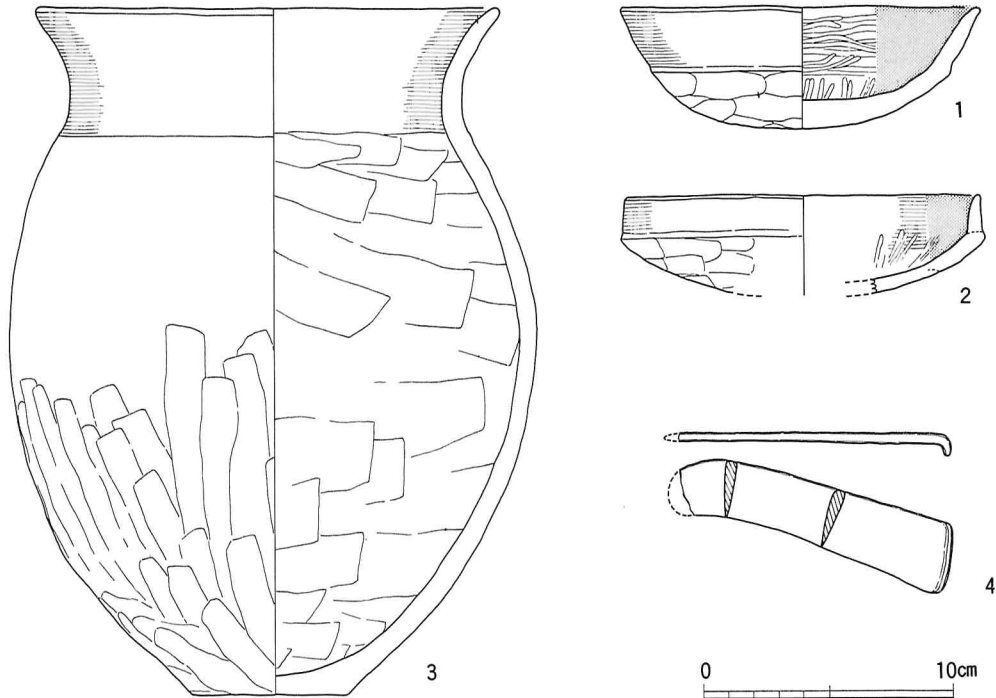
第27図 12号住居跡実測図

(2) 遺物について(第28図)

本住居跡より検出された遺物は、土器と鉄器である。

土器 いずれも土師器であり、図示し得たのは坏2点(1・2)と甕1点(3)の計3点である。1の坏と3の甕は床面から、2の坏は覆土中からの出土である。

鉄器 南西コーナー近くの壁際下層から出土した曲刃の鎌(4)1点である。残存長は11.3cmで、刃幅は2.3~2.6cmである。なお、装着部の角度は100°前後である。



第28図 12号住居跡出土遺物実測図

番号	器種 (残存量)	口径 器高 底径cm	器形の特徴	調整の特徴		胎土・焼成・色調・その他
				内面	外面	
1	坏 (完形)	14.2 4.8 .	体部外面に稜を有し 口縁部は大きく開く。	口縁部は横位、 底面は放射状の へら磨き。	口縁部は横ナデ。 底面はへら削り。	胎土はやや粗。焼成は 良好。褐色で内面黒色 処理。床面出土。
2	坏 (1/2)	(14.0) (4.0) .	体部外面に稜を有し 口縁部はほぼ直立。	全面ナデの後後 やや粗い放射状 のへら磨き。	口縁部は横ナデ。 底面はへら削り。	胎土は密。暗褐色で内 面黒色処理。覆土中出 土。
3	甕 (完形)	18.2 27.1 6.3	口縁部は大きくくの 字に外反。胴部は膨 らみ、やや上位に最 大径(20.9)。	口縁部は横ナデ。 胴部は横位のへ ら削り。	口縁部は横ナデ。 胴部は上半がナ デ、下半が縦位 のへら削り。	胎土は粗。下半部にス ス附着。明褐色。床面 出土。

第7表 12号住居跡出土土器観察表

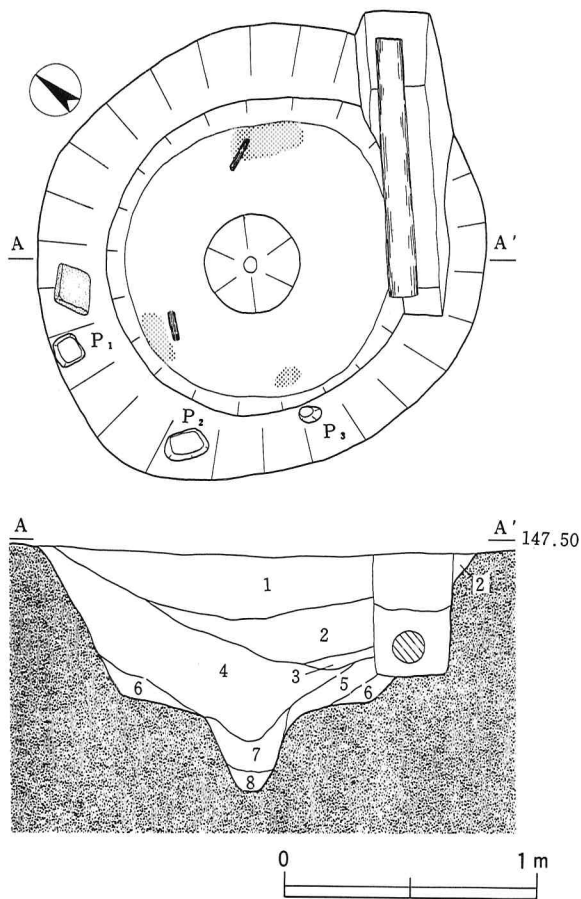
円形有段土坑

本土坑は7号住居跡の南約1mから検出されたものである。平面形はほぼ円形で、径は短い部分で3.35m、長い部分で3.6mである。確認面からの深さ約1.15mのところ底面状の段がつくられ、この部分の大きさは径2m前後である。さらにこの段のほぼ中央にピットが掘られているわけであるが、このピットは平面形が径75cmの円形で、底面をつくらないロート状であり、段からの深さは68cmである。また、段までの壁面には3個のピット(P₁~P₃)が検出されており、それぞれの深さはP₁が15cm、P₂が17cm、P₃がやや深く25cmである。

段の部分には、3か所から焼土の集中するところが検出されているが、それらはいずれも壁際に寄っている。また、若干ではあるが、炭化物も検出されている。覆土の埋没状況は、土層断面でみるかぎり自然埋没とみられる。なお、覆土の全体には炭化物や焼土の混入が多く、特に中央ピットの中からは多量の炭化物が検出されている。

出土遺物は上層から少量の土師器が検出されている。いずれも小破片のため図示することはできないが、ロクロの使用痕跡がみられるものである。第1次調査の時にも、この種の歴史時代(奈良~平安時代)に属するとみられる土器が検出されていることから、本土坑も他の竪穴住居跡よりは新しい時期のものとみてよいようである。

なお、壁面を切っている長方形の土坑は、切断した電柱を埋めるためのものであり、重機で掘られたものである。



- 1 黒色土 (ローム粒, 焼土少量混入)
- 2 黒褐色土 (ローム粒多量, 焼土混入)
- 3 黄褐色土 (ロームブロック多量混入)
- 4 褐色土 (ローム粒, 焼土多量混入)
- 5 褐色土 (ロームブロック, 焼土, 炭化物混入)
- 6 赤褐色土 (焼土, 炭化物多量混入)
- 7 黒褐色土 (炭化物多量混入)
- 8 褐色土 (粘質, 炭化物混入)

第29図 円形有段土坑表測図

V ま と め

以上が今回の調査で検出された遺構および出土遺物の様相である。第1次調査分を含めると検出住居跡数は11軒であり、約500m²（第1次が約200m²、第2次が約300m²）という狭い調査面積からすると、遺構密度はかなり高いものである。また、調査地区は底平な台地の東端部であり当然予想される西方への遺構群の広がりを考えると、本遺跡は市内でも屈指の大集落跡であるとみられる。

さて、ここでは本報告のまとめとして、遺構的に特徴的であると思われるカマドと住居跡出土土器群の様相との2点について簡単に触れておくことにしたい。

1 カマドについて

カマドは今回の調査で5例(6, 7, 9~11号住居跡)検出されたが、6号住居跡のものを除くすべては、袖部の惣がローム地山の削り出しによるものである。これは竪穴の掘削段階において計画的に掘り残し、削り出したものであり、内方への長さは短いもので40~50cm、長いものでは80cm近くもある。また、床面からの高さは25~35cmほどであることが、残存状態の良好であった10・11号住居跡例からわかる。カマドはこれらを惣として、天井および袖部側面を粘土で構築していたものとみられる。

破損した土器などを袖の惣として使用するカマドはまれにみられるが、通常は6号住居跡例のように袖から天井にかけてすべて粘土で構築したとみられるものが多いようである。たとえば本遺跡から南へ約5kmの聖山公園遺跡^{註1}では、50近く検出されたカマドの大部分が6号住居跡例に類したものであり、大きな相違をみせている。

このようにローム地山を削り出して袖の惣としている例は県内でも調査例が少なく、明確に報告されているものとしては宇都宮市権現山北遺跡4号住居跡^{註2}、市貝町久保遺跡SI06号住居跡^{註3}など数えるほどしかみられない。さらに、本遺跡のようにこのような造りのカマドが大部分を占めてくる(第1次調査でも検出された2つのカマドは同じものである)という状況は他にみられず、極めて地域的な特色を示しているものとみられる。ただし、後述するように本遺跡の住居跡群および前掲2例の住居跡がいずれも古墳時代後期後半に位置付けられることから、このような造りのカマドがあるいは時期的にも限定されてくることが予想できる。

2 土器について

今回の調査で出土した土器は、11号住居跡の須恵器高坏片(才26図5・6)を除き、すべて土師器である。器種は甕、甗、碗、坏および手づくねの5種で、前2者にはそれぞれ大・小がみられる。10号住居跡で多数出土した手づくね土器あるいは9・10号住居跡で出土した多孔式の小形甗など興味ある事例はいくつかあるが、取りあえずここでは最も多く出土した坏について触れておくことにしたい。

各住居跡から出土した坏は、器形の変化から外面に稜を有して口縁部が外反するもの(A類)、同じく直立するもの(B類)、同じく内傾するもの(C類)、そして扁平な半球形状のもの(D類)の4つに分かれる。また、これらは調整手法から内面を中心としてヘラ磨きを施すもの(I類)と横ナデのみのもの(II類)との2種に分けることができる。さらに、内面黒色処理の有無も一つの基準になるものとみられる。このような観点から各住居跡出土の坏を整理すると才8表のようになる。

住居跡	A		B		C		D	
	I	II	I	II	I	II	I	II
6号住居跡	1		4	5	2, 3		6, 7	
7号住居跡	①	③	2					
9号住居跡			3, 5	4	2	1	⑥	
10号住居跡			2		1		3	
11号住居跡							①, ②, ④	3
12号住居跡	①		②					

第8表 各住居跡出土土師器坏の分類(数字は挿図の土器番号, ○は内面黒色処理)

このような時期の土師器坏類のセットを最も良好に検出しているのは、市内では権現山北遺跡4号住居跡であり、カマド周辺の床面から41点が出土している。その内訳は、前記した分類に従えばA-I類が2点、B-I類が1点、C-I類が19点(うち内面黒色処理2点)、D-I類が18点(うち内面黒色処理2点)、その他1点であり、本遺跡では6号住居跡および9・10号住居跡がセット的に割合近い状況を示している。ただし大きさの面から見ると、本遺跡のものの方が全体に口径が小さく、器高が浅くなっており、小形化・扁平化が進行していると言える。また、調整の面でも内面にヘラ磨きを施ささないII類が存在していることは、新しい傾向ととらえることができる。なお、A・B類で構成される7・12号住居跡やD類のみの11号住居跡は、いずれもC類が欠除するという点で共通するものであり、一つの伝統的な形態の消失という観点でとらえることもできよう。

以上のように、本遺跡出土の土師器坏群は権現山北遺跡4号住居跡出土のものに後続するとみられるものであり、時期的にはおそらく7世紀前半代と考えられる。

註1 宇都宮市教育委員会「聖山公園遺跡I~IV」 昭和58~61年

註2 久保哲三ほか「権現山北遺跡」宇都宮市教育委員会 昭和54年

註3 初山孝行 田代隆 「久保遺跡」才1・2次発掘調査概報 栃木県教育委員会 昭和57年

図 版

PL. 1



① 調査前の風景（南から）



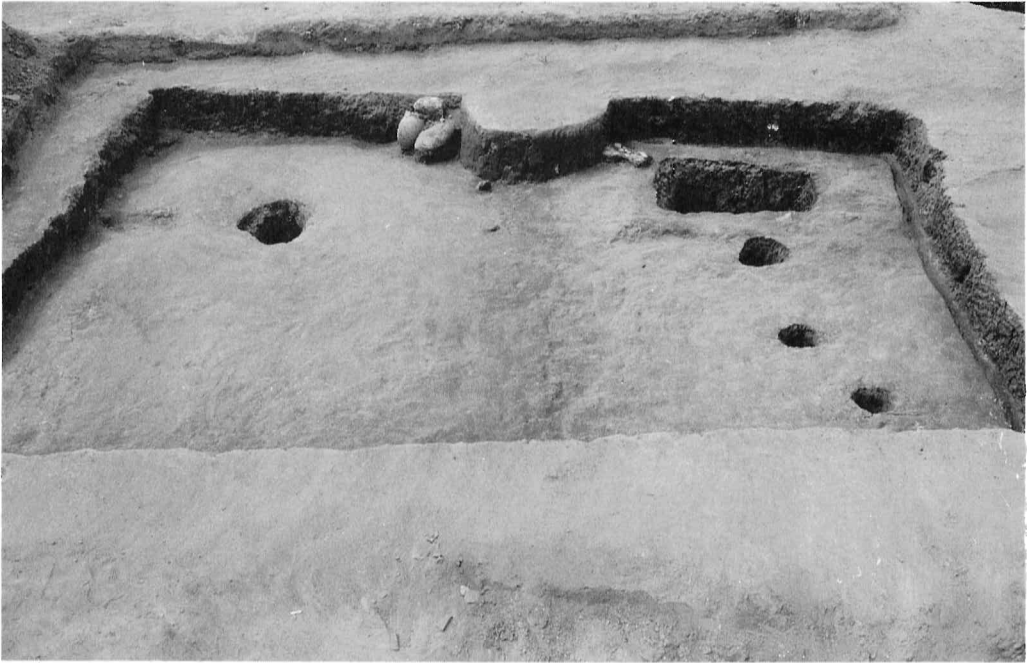
② 試掘調査の風景（北西から）



① 遺構検出状況（南から）



② 発掘調査風景（北から）



① 6号住居跡 (南から)



② 6号住居跡カマド



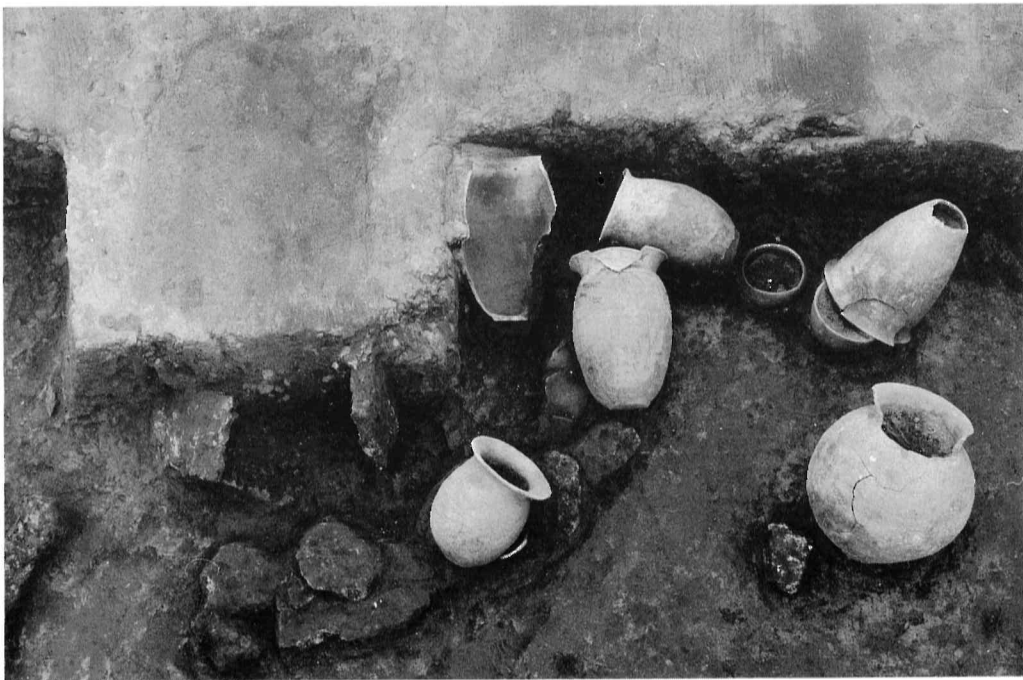
① 7号住居跡 (西から)



② 7号住居跡カマド



① 9号住居跡遺物出土状況（南から）



② 9号住居跡カマド周辺遺物出土状況



① 9号住居跡（南から）



② 9号住居跡カマド



① 10号住居跡遺物出土状況（西から）



② 10号住居跡カマド



① 11号住居跡 (南から)



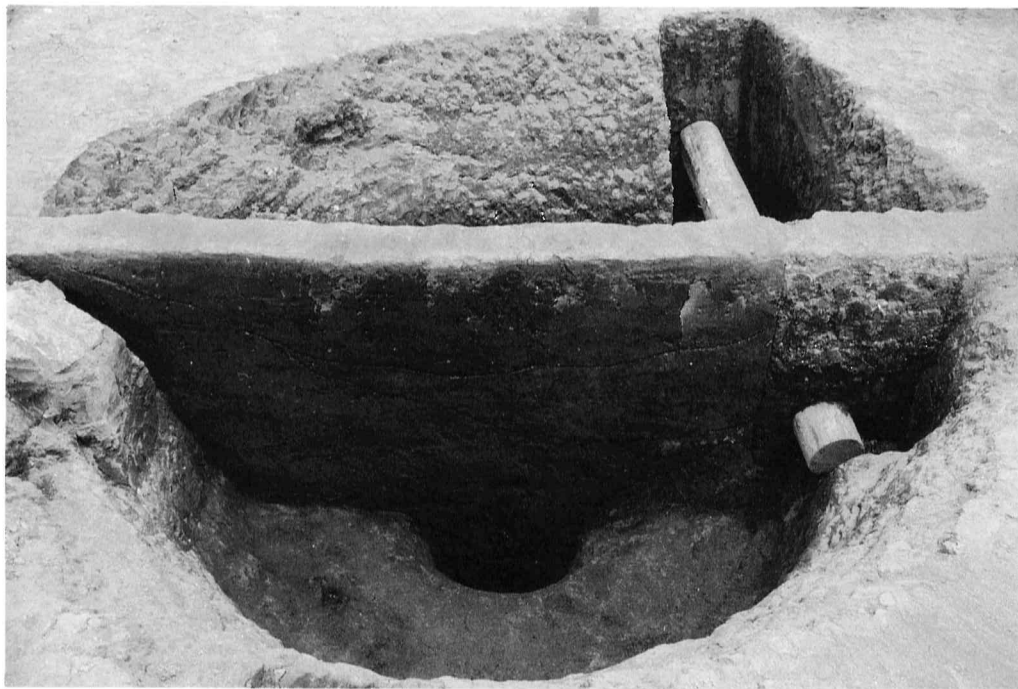
② 11号住居跡カマド



① 12号住居跡（南から）



② 12号住居跡鎌出土状況



① 円形有段土坑断面 (西から)



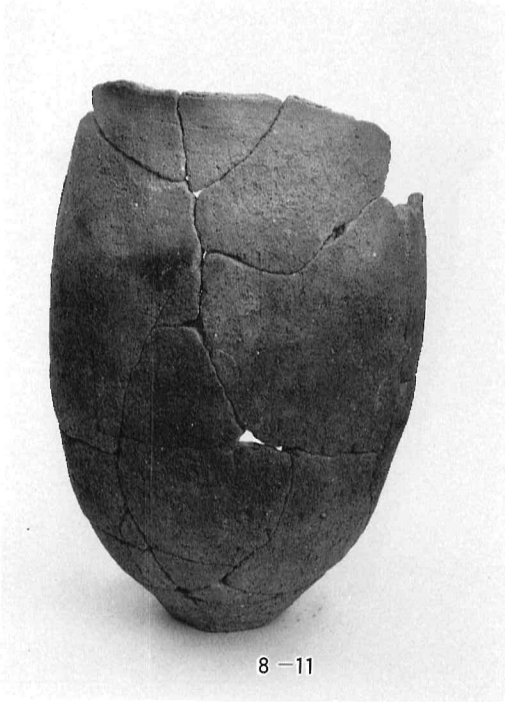
② 円形有段土坑



① 遺構全景 (南から)



② 遺構全景 (北から)



住居跡出土土器(1)



住居跡出土土器(2)



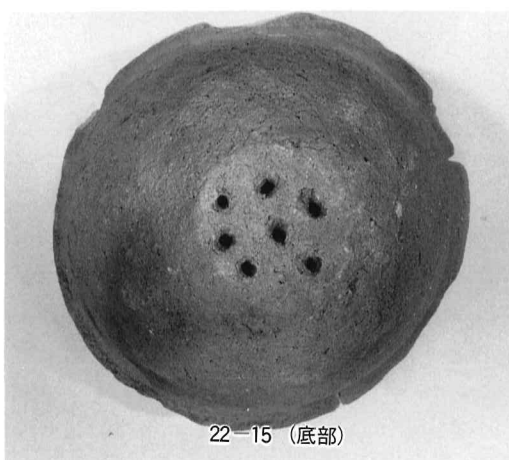
16-8



22-15



16-8 (底部)



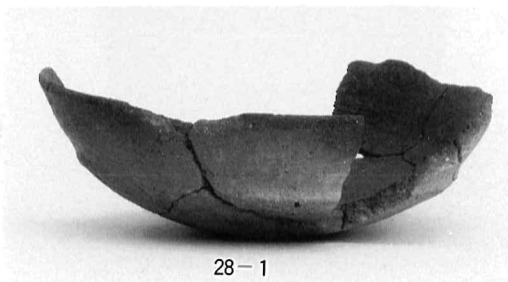
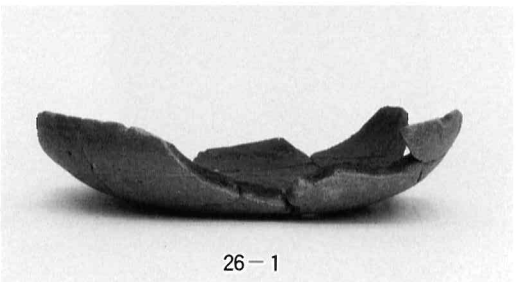
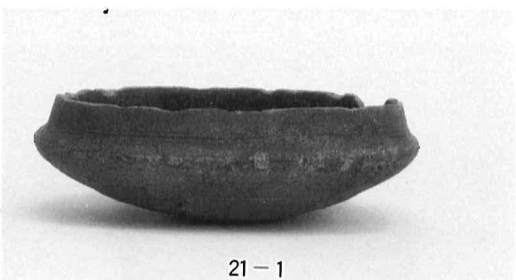
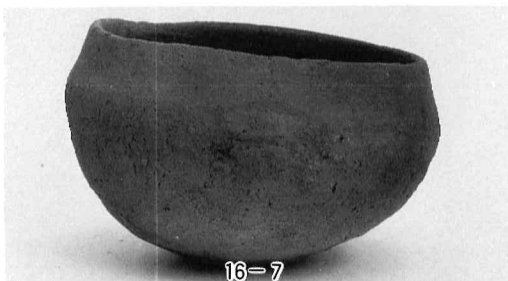
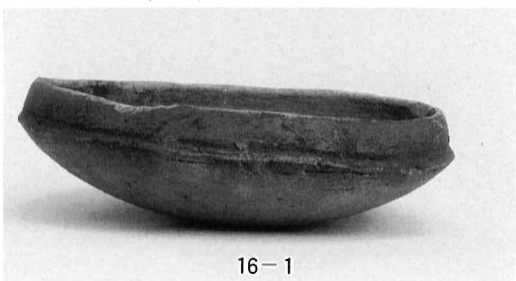
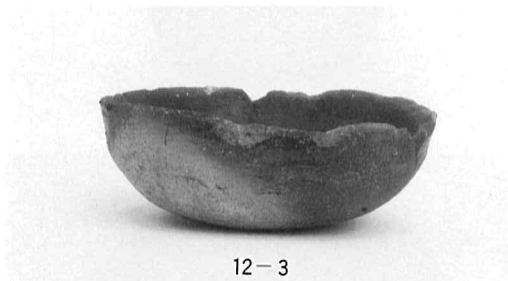
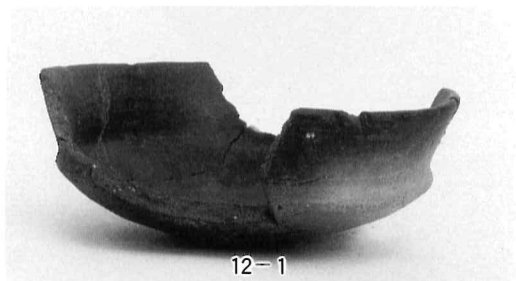
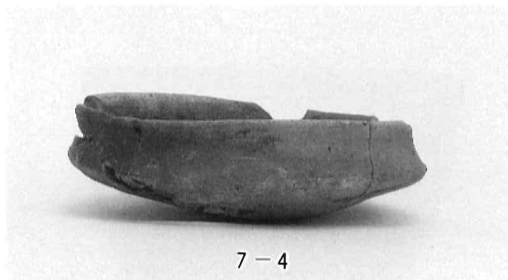
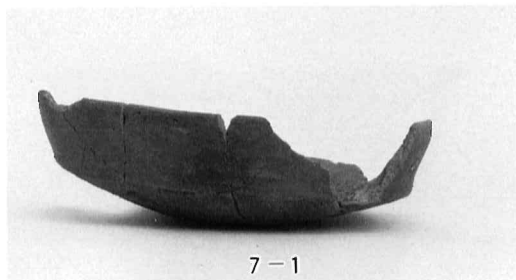
22-15 (底部)

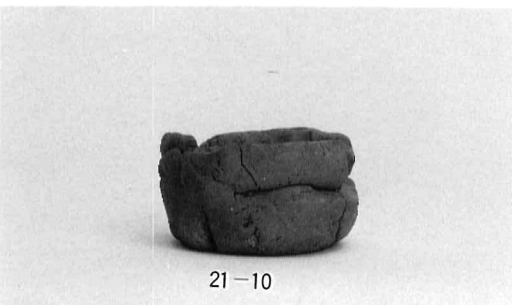
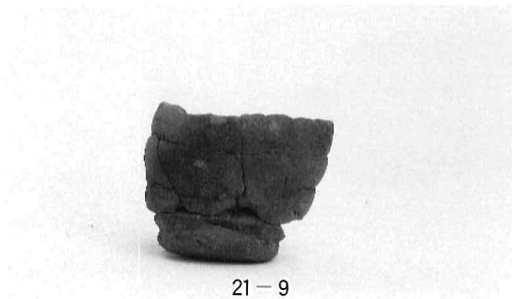
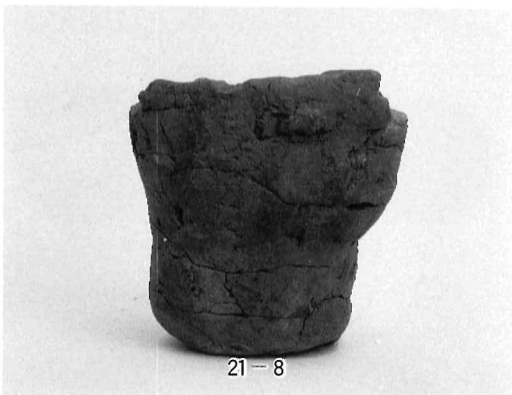
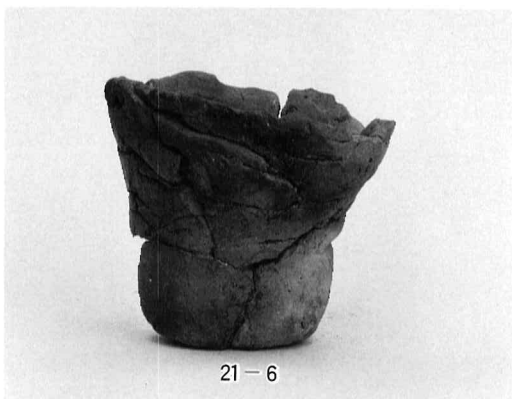
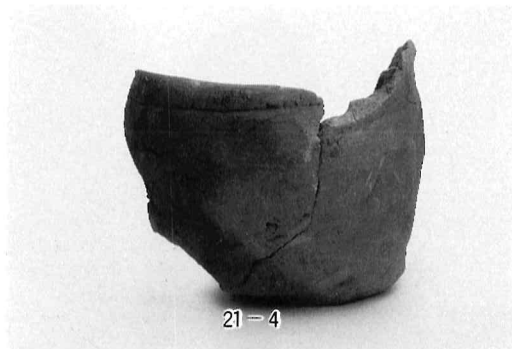
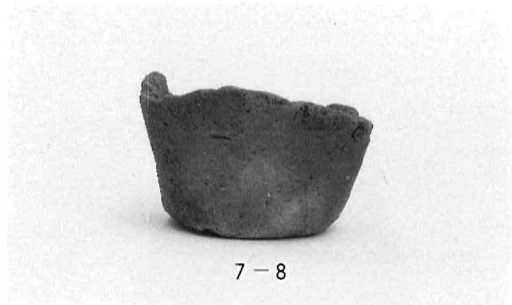


21-12

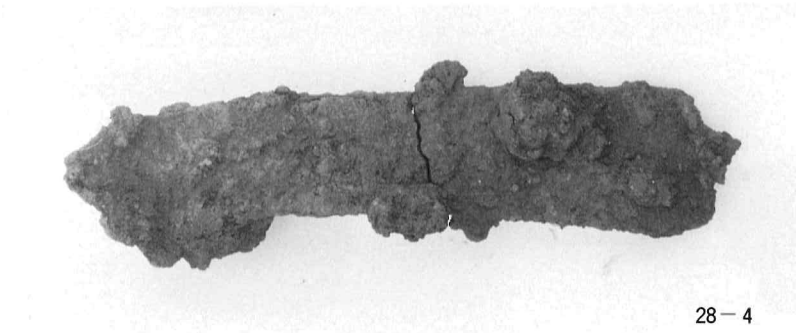
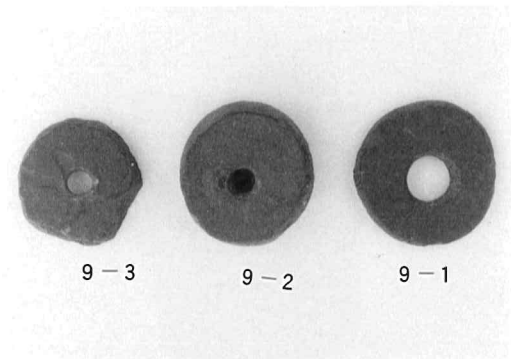


21-11





住居跡出土土器(5)



住居跡出土遺物

宇都宮市埋蔵文化財調査報告第22集

向山根遺跡
—第2次発掘調査報告—

昭和62年6月発行

発行 宇都宮市教育委員会社会教育課
(宇都宮市旭1丁目1番5号)

TEL (0286)32-2743

印刷 (株)松井ピ・テ・オ印刷
(宇都宮市平出町4287-7)

TEL (0286)62-2511
